



Title	時空と認知の言語学 XIII（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2024, 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97327
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト 2023

時空と認知の言語学XIII

高橋 克欣

瀧田 恵巳

田村 幸誠

春木 仁孝

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2024

言語文化共同研究プロジェクト 2023

時空と認知の言語学 XIII

目次

高橋克欣
フランス語の直說法半過去形と談話的時制解釈
－高橋（2016）の仮説に対する検討－.....1

瀧田恵巳
『デュランデ城』におけるダイクシス（その2）
－原点移動の事例を中心に－.....11

田村幸誠・松浦幸祐
認知音韻論の発展に向けて：
日本語の VOT とアクセント移動を事例に.....21

春木仁孝
ふたたびフランス語の隠喩性について.....34

フランス語の直説法半過去形と談話的時制解釈

- 高橋 (2016) の仮説に対する検討 -

高橋克欣

1. はじめに

筆者は高橋 (2021)(2022)(2023) において、主節との同時性をあらわす時況節である *quand* 節や *comme* 節の中でフランス語の直説法半過去形（以下、「半過去」とする）が用いられる場合の特徴について、これらの時況節の談話解釈上の機能と半過去の解釈メカニズムに着目して考察を重ねてきた。

それらの考察をつうじて、時況節の中で用いられる半過去の談話解釈における特徴を明らかにするためには、まずは主節において用いられる半過去のさまざまな用法を談話解釈の観点からもういちど見直してみる必要があることをあらためて強く認識するに至った。

そこで本稿では、かつて筆者が高橋 (2016) において半過去の解釈に関して提示した仮説を再検討し、文学作品から収集した用例の分析を中心として考察を行い、仮説の修正案を提示することを目指す¹。

本稿の構成は次のとおりである。まず 2 節で談話解釈における半過去のはたらきに関する高橋 (2016) の仮説を振り返り、検討を要する点を確認する。それをふまえ、3 節では文学作品からの引用例に基づき半過去と同時性の問題について考察し、4 節では高橋 (2016) で提示した仮説の修正案を示す。続く 5 節では半過去の解釈における認識枠が言語文脈以外によって設定される場合について論じ、6 節では本稿のまとめを行い今後の課題に言及する。

2. 談話解釈における半過去のはたらきに関する高橋(2016)の仮説

高橋 (2016) では、非自立的な時制であると考えられる半過去が担う事態の定位機能を、次のような形で仮説として提示した。

(1) 高橋 (2016) における仮説

半過去は過去時制であり、談話時空間内の過去に位置づけられる事態を表す。時間軸上に直接事態を位置づける「投錨」とは異なり、半過去による「係留」は相対的な操作である。半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての役割を果たす認識枠が解釈上設定される必要がある。この認識枠にはさまざまな種類があるが、言語文脈上構築される認識枠のことを「母時空間」と呼ぶ。半過去の「係留」操作は、当該の事態を過去時に位置づけるだけ

¹ 出典が明記されていない例文は筆者の作例である。また、出典が明記されていない訳文は筆者によるものである。

でなく、当該の事態と母時空間との間に「部分 - 全体」の関係が成立することによって実現される。(高橋 (2016)からの引用)

この仮説は、時況節である *quand* 節の中で用いられる半過去の解釈に対する説明としては妥当であると考えられるが、半過去全般の解釈に対する妥当性を考慮するとき、この仮説にはさらに検討を要する点がいくつかある。

そのひとつは、「母時空間」の概念の妥当性である。この仮説では、半過去の安定的な解釈において必要とされる認識枠のうち、言語文脈上で構築されるものを「母時空間」と呼んでいる。そして、当該の半過去によって表される事態と母時空間との間に、「部分 - 全体」の関係が成立するとしている。

ところが、半過去の用法を説明する際の典型的な例文であると考えられる次のような例において、母時空間はどのようなものであるのかという点が問題になる。

(2) *Paul est sorti. Il pleuvait.*

ピエールは外出した。雨が降っていた。

単純に考えれば、第1文で用いられている複合過去 *est sorti* 「外出した」によって表されるできごとが母時空間が設定される際の引き金になると考えることができそうだが、仮にそのように考えるとしても、「外出した」という瞬時的なできごとと *pleuvait* 「雨が降っていた」という事態との間に見いだされる関係は、「外出した」のほうが部分的であり、「雨が降っていた」のほうを全体と見なすほうが自然ではないかという指摘がなされることが想定される。つまり、半過去は全体に対する部分を表すという仮説には問題があるのではないかということである。

高橋 (2016) の半過去に関する仮説の問題点としてもうひとつ考えられることは、言語文脈以外の要素が十分に考慮されていない点である。この仮説では言語文脈上に構築される認識枠をとりわけ「母時空間」として規定しているが、いうまでもなく、半過去の解釈に関与する要素は言語文脈に限定されるわけではなく、話し手と聞き手の共有知や共有体験、話し手と聞き手が存在する発話状況などが半過去の解釈において重要なはたらきをもつことがある。談話解釈の観点から時制のはたらきを説明しようとするならば、言語文脈だけを特別扱いするのではなく、共有知識や共有体験、発話状況など、談話解釈に関与するさまざまな要素を視野に入れた理論を構築することが必須となる。

そこで3節では、まず「母時空間」の概念の妥当性について考えるために、一般的に半過去の特性として考えられている「同時性」の問題を論じることにしたい。

3. 半過去と同時性

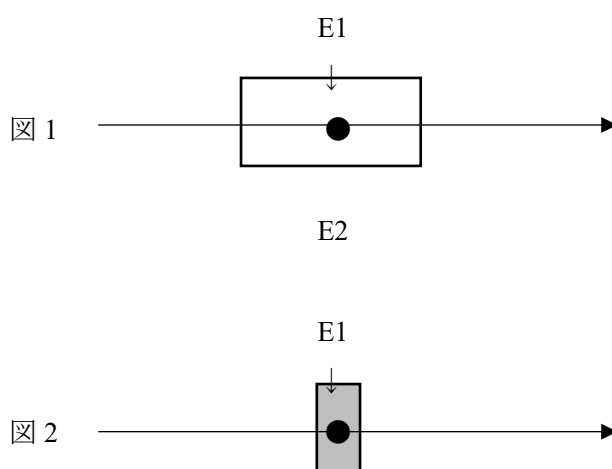
半過去が同時性をあらわす、という場合に言及される典型的な例文は先ほど示した (2)

のようなものである。

(2) Paul est sorti. Il *pleuvait*.

ピエールは外出した。雨が降っていた。

このような例における半過去のはたらきを説明するために、東郷 (2011) では次のような図が示されている。



(図 1, 図 2 はいずれも東郷 (2011) からの引用)

一般的には、図 1 のように、黒丸の E1 が複合過去 (*est sorti*) を表し、長方形の E2 が半過去 (*pleuvait*) を表すと説明される。そして、未完了時制である半過去は、他の完了時制によって表される事態との同時性を表すことになる。しかしながら、半過去によって表される事態はかならずしも時間的な長さを持つとは限らないため、図 2 のように E2 は幅のせまい四角で表現されるべきであると東郷 (2011) では説明されている²。

この説明、すなわち半過去が常に時間的な長さを持つ事態を表すとは限らないのはそのとおりであるが、半過去が常に他の完了時制との同時性を表すとは限らない点を高橋 (2016) の仮説の中でどのように扱うか、という点をさらに考える必要がある。

たとえば、次の例における半過去を見てみたい。

(3) Elle baissa la tête. Alors il lui demanda si elle pensait au mariage. Elle reprit, en souriant, que c'était mal de se moquer. - « Mais non, je vous jure ! » et du bras gauche il lui entoura

² 東郷 (2011) では、図 2 の四角が「窓」の比喻を用いて説明されている。半過去が表しているのはあくまでも窓から見えている屋外の景色の一部であり、その景色の全体を眺めることはできない、すなわち半過去によって表される事態の始点と終点は問題にならないということである。

la taille ; elle *marchait* soutenue par son étreinte ; ils se ralentirent.

(Gustave Flaubert, *Un cœur simple*.)

彼女は項垂れた。すると、男は彼女に結婚する気はないかと訊いた。彼女は微笑みながら、からかつてはいけないと言った。

「からかつてなんかいない、誓っているんだ！」

男は左の腕で彼女の胴を抱え、彼女は抱えられるがままに歩いて行った³。

(3) の例における半過去 *marchait* 「歩いていた」が、その直前の単純過去 *entoura* 「(彼女の腰に) 手を回した」というできごととの同時性を表すという解釈は不自然であり、むしろ単純過去 *entoura* に続く行為を未完了的に表現したものと解釈されるべきである。ちなみに、*marchait* が、それに後続する単純過去 *se ralentirent* 「(歩みを) 緩めた」との同時性を表すという解釈も不自然である。

さらに、次の (4) のように、半過去が連続的に用いられ、しかもそれらの半過去が継起的な解釈を受ける例もある。

(4) Quand elle avait fait à la porte une gémflexion, elle *s'avavançait* sous la haute nef entre la double ligne des chaises, *ouvrait* le banc de Mme Aubain, *s'esseyait*, et *promenait* ses yeux autour d'elle.

(Gustave Flaubert, *Un cœur simple*.)

教会の戸口で跪礼をすると、フェリシテは天井の高い身廊の下、二列に並んだ座席の間を進んで行った。彼女はオバン夫人の腰掛けを開けて、そこに座ると、辺りに目を遣った⁴。

(4) では、*s'avavançait* 「(前に) 進んで行った」、*ouvrait* 「開けていた」、*s'esseyait* 「座っていた」、*promenait* 「(視線を) 泳がせていた」というように、4つの異なる動詞の半過去が連続的に用いられているが、これらの行為がすべて同時に展開していたという解釈ではなく、それぞれの行為が継起的に捉えられているという解釈が自然である。

さらに、次の (5) のように半過去によって章や節が開始されることもめずらしいことではない。

(5) Le téléphone portable programmé pour le réveiller à 5 h 30 *vibrait* de toute sa coque sur la table de nuit. Sous la surface ondoyante de l'eau, Rouget de Lisle le *regardait* de ses yeux globuleux. Lundi. Il n'avait pas vu passer le dimanche. Levé trop tard, couché trop tôt. Un jour sans. Sans envie, sans faim, sans soif, sans même un souvenir. Rouget et lui avaient

³ 訳文は、西村勇 (2014) から引用した。

⁴ 訳文は、西村勇 (2014) から引用した。

occupé leur journée à tourner en rond, le poisson dans son bocal, lui dans son studio, déjà dans l'attente de ce lundi qu'il détestait.

(Jean-Paul Didierlaurent, *Le lecteur du 6h27*.)

携帯電話は、ベッド脇のテーブルの上で朝五時半に振動し、ギレンを起こすよう設定されていた。水面が波立ち始めると、その下にいるルジェ・ド・リールは、突き出た目でじっと彼のことを見つめる。月曜日だ。日曜日はどこへ消えたのか。起きたのが遅かったし、床に就いたのは早かった。だから、ないも同じになってしまった。なんの欲望も湧かなかった。腹も減らず、喉も渴かない。そしてなんの思い出もない一日だ。

日曜のルジェ・ド・リールとギレンは、どちらも一日、ただ円を描くように動き回るだけだった。金魚のほうは鉢の中で、ギレンはアパルトマンの部屋の中で。頭の中は早くも月曜日のことを思い、すっかり憂鬱になっていた⁵。

(5) のような場合には、展開中の事態を表す半過去を章や節の冒頭で用いることにより、整合的な解釈を可能にするための物語世界がそこに存在することを想起させ、半過去はその物語世界の時空間において展開中の事態を表していると解釈されることになる。その結果として、読み手は突然物語世界の現場に居合わせているかのような臨場感を味わうことになる。

(3), (4), (5) における半過去の用例から分かることは、半過去は常に他の過去のできごととの同時性を表すとは限らないということ、そして事態の継起的な展開を表すために半過去が連続して用いられることがあるということである。

つまり、言語文脈上で半過去が安定的な解釈を受ける場合において、半過去が他の完了時制との同時性を表すことは必須条件であるとはいえず、あくまでも半過去の解釈を安定させるための要素のひとつが「同時性」であると考えられるべきであることが分かる。

4. 仮説の修正

ここで、(1) に示した高橋 (2016) の仮説を、東郷 (2011) における半過去のイメージをとりいれた形で修正するならば、次のような説明が可能であると考えられる。

(6) 高橋 (2016) における仮説の修正

半過去が解釈可能になるためには、半過去によって表される事態の一部を射程に入れた認識枠が設定される必要がある。談話解釈上、この認識枠と半過去によって表される事態とが関係づけられることで半過去の「係留」操作が実現される。この認識枠はさまざまな談話解釈資源を用いて設定されるものであり、この認識枠が過去の時空間に設定される場

⁵ 訳文は、夏目大 (2017) から引用した。

合に、当該の事態が過去時に位置づけられることになる。

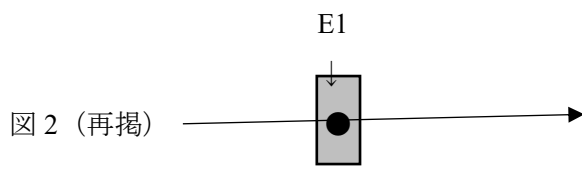
高橋 (2016) で提示した仮説 (1) とその修正案 (6) のちがいは次の点にある。まず、(1) で用いられていた「母時空間」という概念を用いることをやめた点である。これはもともと、quand 節において半過去が用いられる場合の解釈メカニズムを説明するために導入した概念であった。しかしながら、他の時況節において用いられる半過去やさらには主節で用いられる半過去など、広く半過去全般の用例を観察してみると、母時空間といえるようなものが設定されなければ半過去の解釈が成立しないとはかならずしもいえず、この母時空間の概念は、やや一般性に欠けるものであると判断せざるをえない⁶。

(1) と (6) のちがいは、認識枠の概念とそれに関連する「部分 - 全体」のとらえ方にも見られる。(1) では認識枠について、「半過去が安定した解釈を受けるためには、半過去によって表される事態を部分的な要素として含み持つ全体としての役割を果たす認識枠が解釈上設定される必要がある」としていた。ところが、半過去の解釈において必要とされる認識枠は全体としての役割を果たさなくてもよいため、(6) では「部分 - 全体」の関係性に関する記述を削除した。

なお、(6) では「半過去によって表される事態の一部を射程に入れた認識枠が設定される必要がある」と規定されており、半過去は当該の事態が部分的にとらえられていることを表すが、これは (1) で考えられていた「部分 - 全体」の関係性とは異なるはたらきである。

ちなみに、(6) における認識枠は、いわゆる視点に相当するものと考えることができるが、視点と同様に、この認識枠は談話が進行するにしたがって移動することが可能であり、この認識枠の中で当該の事態がとらえられることにより、結果的にそれぞれの事態が眼前において展開中であるという印象を与えることになる。また、この認識枠が完了を表す他の過去時制によって設定される場合に、半過去が他の過去時制との「同時性」を表すことになる。

(6) における認識枠は、東郷 (2011) の図 2 における縦長の四角に相当するが、過去のできごとを表す他の完了時制 E1 によって言語文脈上に設定されるとは限らないことに留意する必要がある。



⁶ これは本稿の主旨から離れてしまうが、談話解釈において母時空間の設定を必要としたうえで、当該の半過去が「部分」の役割を果たし、母時空間が「全体」の役割を果たすことは、半過去自体の特性というよりも、時況節 quand の特性であると考えべきである。このことについては、稿をあらためて論じることとしたい。

そこで次の 5 節では、高橋 (2016) の仮説に関して検討を要するもうひとつの点である、言語文脈以外の要素が関与して半過去の解釈における認識枠が設定される場合について考察する。

5. 半過去の解釈における認識枠が言語文脈以外によって設定される場合

すでに述べたように、半過去の解釈は言語文脈上の要素のみと関与的であるわけではない。次の (7) の例では、話し手と聞き手が共有する過去の情報を参照することで半過去の解釈が可能となる。

(7) Quand est-ce que, déjà, elle *allait* chez le médecin ? Je ne me rappelle plus.

彼女はいつ医者に行ったのだったっけ？もう覚えていないんだ。

(Berthonneau et Kleiber (1993) からの引用)

(7) において半過去が用いられた文に後続する文から明らかなように、(7) において半過去が解釈される際には、明示的に言語化された先行文脈上に存在する要素を参照するのではなく、*déjà* のはたらきにより、話し手と聞き手が共有していると考えられる知識にアクセスすることが求められる⁷。

なお、(7) では「彼女が医者に行った」のは過去の時空間に定位されると解釈されるべきごとであるが、*déjà* が半過去とともに用いられる場合には、当該の事態が必ずしも過去の時空間に属するとは限らない。次の (8) のように、発話時点すなわち現在においても成立する事態が半過去を用いて言及されることもあり、このような半過去は、発話時点において獲得済みであり聞き手が話し手と共有していると考えられている知識にアクセスすることで解釈が可能となるのである。

(8) Comment s'appelait-il, déjà ?

彼は何ていう名前だったっけ？

(7) や (8) のような半過去の解釈における認識枠は話し手と聞き手の共有知識を援用して設定されと考えられ、当該の事態が過去の時空間において直接定位されるわけではない。

また、Tasmowski-de Ryck (1985) が指摘するように、発話状況において知覚され、言語化されない要素を参照して解釈が可能となる半過去の用例も存在する。

⁷ 定延 (2010) が「情報のアクセスポイント」という概念を用いて日本語の「た」の解釈について論じているのも、これと同種の議論であると考えられる。

(9) (激しい物音と揺れに驚いた相手に対して)

Oh rien, il *fermait* la porte.

ああ何でもないよ、彼がドアを閉めたんだ。

(Tasmowski-de Ryck (1985) からの引用)

(9) の例では、先行する言語文脈は存在しないが、話し手と聞き手が存在する場において双方が知覚した非言語的な情報である激しい物音や揺れを参照することで、当該の半過去の解釈が可能となる。このような半過去の解釈における認識枠は、発話状況において設定されると考えることが可能である⁸。

6. まとめと今後の課題

本稿では、主節において用いられる半過去の談話的時制解釈について、高橋 (2016) において提示した仮説を再検討する形で考察を行った。

まず、高橋 (2016) の仮説において導入された「母時空間」という概念の妥当性について検討を行った。母時空間は、半過去によって表される部分的な事態に対する全体のはたらきを担う談話時制解釈上の概念であるが、半過去の用例全般の解釈メカニズムを説明する際に必須の概念であるとは判断しがたく、「部分 - 全体」という関係性ととも仮説から削除することにした。

そのかわりに、半過去全般の解釈に必須の要素として、「認識枠」の概念を用いることとした。認識枠の設定に際しては、言語文脈に限らず、発話状況や共有知識、共有体験などに属するさまざまな談話解釈資源が参照されることを確かめた。

また、文学作品からの引用例にもとづき、半過去の特長として論じられる「同時性」について検討を行った。半過去が、他の完了時制によって表される過去の事態との同時性を表す場合が多いことはたしかに事実であるが、これは、本稿における鍵となる概念である「認識枠」が完了を表す過去時制によって設定される場合に見られる特性であり、他の完了時制や半過去によって表される事態との同時性を表さない半過去の用例、物語の冒頭で用いられる半過去の用例もあり、このような半過去の解釈においては他の完了時制に依存せずに認識枠が設定され、場合によって談話の進行にしたがって認識枠が移動することもあることを確かめた。

今後の課題として、「認識枠」の概念をさらに精緻化することがあげられる。4 節において述べたように、本稿における「認識枠」の概念は視点の概念に相当するものと考えることができるが、視点の概念自体が十分に自明なものとはいえないのと同様に、「認識枠」の概念も、その設定のなされ方、移動のしくみ、他の要素との関係など、談話解釈上明らかにす

⁸ あるいは、このような場合には、話し手と聞き手の共有体験を参照して半過去が解釈されると考えることもできる。

べきことは少なくない。

本稿では主節における半過去の用例を考察対象としたが、将来的には時況節や関係節において用いられる半過去についても多くの用例の観察および分析を行い、談話解釈上で半過去が見せるさまざまな特性を明らかにしていきたい。

最後に、本稿のテーマから離れてしまうが、現在筆者が関心を寄せている問題のひとつとして、Chat GPT に代表されるような生成 AI における時制の取り扱いがどのようなになっているか、というものがある。

たとえば、本稿の執筆時点である 2024 年 5 月現在、Chat GPT に対して「quand 節を用いて、『私たちが森の中を散歩していたとき、一頭の熊に出会いました』という文をフランス語に訳してください。」という指示を与えると、次のようなフランス語文が出力される。

(10) ?Quand nous nous promenions dans la forêt, nous avons rencontré un ours.

(10) では前置された quand 節の中で半過去が用いられており、あらためて言及するまでもなく、これは半過去の使用制約に関する古典的な問題をふくみ、適切な文脈に置かれなければ不適切であると判断される文である。

生成 AI の技術的進歩には目を見張るものがあり、いずれは改善される問題であると推測することができるが、少なくとも現状においては生成 AI の回答をそのまま適切なものとして受け取ることができない点にどのように対応すべきであるか、言語学的な観点および教育的な観点からの検討が必要な問題といえるのではないだろうか。

今後はこれらの問題について多数の用例を詳細に分析したうえで考察を重ね、人間の時間認識とその言語化のあり方という言語認知科学的に意義深い問題に関して、さらに理解を深めることを目指したい。

参考文献

Anne Marie Berthonneau et Georges Kleiber (1993) Pour une nouvelle approche de l'imparfait :

l'imparfait, un temps anaphorique méronomique, *Langages*, 112, pp.55-73.

Liliane Tasmowski-de Ryck (1985) L'imparfait avec et sans rupture, *Langue française*, 67, pp. 59-77.

定延利之 (2010) 「た」発言をおこなう権利『日本語/日本語教育研究』1, pp. 5-30.

高橋克欣 (2016) 『「こと」の認識「とき」の表現 - フランス語の *quand* 節と半過去』京都大学学術出版会.

高橋克欣 (2021) 「談話における時況節のはたらきと半過去の解釈メカニズム - 談話的時制解釈の観点からの分析 - 」『時空と認知の言語学X』言語文化共同研究プロジェクト 2020 : pp.11-19.

高橋克欣 (2022) 「時況節の位置と談話解釈上の機能 - *quand* 節と *comme* 節の分析 - 」『時空と認知の言語学XI』言語文化共同研究プロジェクト 2021 : pp.11-18.

高橋克欣 (2023) 「談話解釈における時況節 *alors que* 節の機能」『時空と認知の言語XII』言語文化共同研究プロジェクト 2022 : pp.20-29.

東郷雄二 (2011) 『中級フランス語 あらわす文法』白水社.

訳文の出典

ジャン＝ポール・ディディエローラン (著)・夏目大 (訳) (2017) 『6時27分発の電車に乗って、僕は本を読む』ハーパーコリンズ・ジャパン.

ギュスターヴ・フローベール (著)・西村勇 (訳) (2014) 『純な心』東京図書出版.

『デュランデ城』におけるダイクシス（その2）

—原点移動の事例を中心に—

瀧田恵巳

1. 問題提起

Alewyn(1957/1974 :221)によると、Eichendorff の作品においては、her-+前置詞（herauf, herüber 等）と hin-+前置詞（hinein, hinaus 等）が風景描写に用いられることにより Hier 「ここ」が導入される。確かに her は基本的意味として「話し手もしくは話し手に準じるもの（以降下線部を便宜上「話者」と呼ぶ）へ向かう方向」を表し、hin は「話者から離れる方向」を表すことから、Hier の導入は容易に推定される。しかし Alewyn(1957/1974)は風景描写と Hier に関する網羅的な検討に欠けていることから、瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)では、Ehlich(1985)が扱った『デュランデ城 Das Schloss Dürande』を対象に her と hin を第一の構成要素として共通する空間的方向を表す herab-hinab 等の対立語彙（以降 her-と hin-と表記する）の用例における風景描写の使用状況と Hier の導入を検討した。

Alewyn(1957/1974)の風景描写は、輝きや音響などを遠近感のある運動とすることで広範囲の状況を描写するものである(瀧田 2018 :28)。さらに Alewyn(1957/1974)のいう風景描写の Hier は、Ehlich(1985)が Origo 「原点」と呼ぶ場面の中心（以降「原点」と呼ぶ¹）であるとともに、知覚主体（登場人物）が占める傾向を示す。以上のことから、Alewyn(1957/1974)のいう風景描写とは、her-と hin-が光や音響の移動方向を表し、且つ原点を占める知覚主体が her-の表す方向の目標及び hin-の表す方向の起点に位置する描写と考えられる。例えば(1)では、heraufにより、Strom「流れ」の輝きが上への運動として表現され、この運動が登場人物 er（日本語訳「レナルト」）に知覚されることが暗示されている。

- (1) - So war er in den Gartensaal gekommen. Die Tür stand offen, er trat in den Garten hinaus. Da schauerte ihn in der plötzlichen Kühle. Der untergehende Mond weilte noch zweifelnd am dunkeln Rand der Wälder, nur manchmal leuchtete der Strom noch herauf, [...] (SD:44)

—こうしてレナルトは庭むきの広間に下り、あけたままになっていた戸を通して、庭園に歩み出た。突然の冷気に彼は思わず身ぶるいした。沈みぎわの月が、暗い森の端にまだおぼつかなくかかり、ときたま流れをきらきらと輝かせている。(221)²

しかし風景描写の用例は、her-が総数 28 例中 6 例で 21.4%、 hin-が総数 39 例中 2 例で

¹ 瀧田(2018, 2019, 2020, 2021)では、この場面の中心を、Alewyn(1957/1974 :221)と Ehlich(1985)との関連を重視して Hier/Origo と呼んだが、本論文では Origo の本来の意味に通じることから「原点」と呼ぶ。

² 『デュランデ城 Das Schloss Dürande』の原文の引用箇所は略号とともにページ数を括弧付で記載し、日本語訳については引用箇所のページ数のみ括弧付で記載する。

5.1%に過ぎない（瀧田 2021 : 25 [表 2]）。また風景描写において、原点が her-の示す方向の目標側に導入される用例は 66.7%という比較的高い割合を占めるが、hin-の示す方向の起点側に導入される用例は無く、従ってその割合は 0.0%である（瀧田 2021:25 [表 3]）。

それに対して、風景描写以外の用例は全体において高い割合を占め、そのうち her-の示す目標側に原点が認められる割合は 54.5%、hin-の示す方向の起点側に原点を位置づけられる例の割合は 59.5%であった（瀧田 2021 : 26 [表 4]）。該当例は次のとおりである。(2)の herauf は、jemand「誰か」が階段を駆け上がる方向を示すとともに、この移動が、hörte という動詞と相俟って、目標側の上の広間にいる man（この場合は階段上の広間にいる中心人物等）によって耳にされていることを示している。(3)の hinaus は、er「彼」が家を出て森に入っていく移動方向を指している。この移動は、後の文脈に描かれる Waldwärter「森番」の知覚が加わることにより、遠方へ離れていく奥行きのある描写につながっている。

- (2) Da ließen sich auf einmal unten Stimmen vernehmen, drauf hörte man jemand eilig die Treppe heraufkommen, immer lauter und näher. „Ich muss herein! “ rief es endlich an der Saaltür, [...]. (SD:32)

そのとき突然、階下で人声がしたと思うと、誰かが急いで階段を駆け上がってきた。足音はしだいに大きく近づいてきて、とうとう広間の扉のところで「入れてくれ！」という叫び声がした。(省略) (208)

- (3) Mit diesen Worten piff er dem Hunde und schritt wieder in den Wald hinaus, wo ihn der Waldwärter bei dem wirren Wetterleuchten bald aus den Augen verloren hatte. (SD:31)

言い終わると口笛を吹いて犬を呼び、彼は森へ帰っていった。入り乱れる稲妻を受けて行く彼の姿は、森番の前からじきに見えなくなってしまった。(207)

以上の結果は、her-と hin-の用例数において風景描写よりそれ以外の割合のほうが高く、また原点の導入は風景描写以外の用例においても顕著であることを示している。

確かに風景描写以外の用例において her-の表す方向の目標側及び hin-の表す方向の起点側に原点が位置づけられる用例数の割合は、54.5%と 59.5%で比較的高いといえる。しかしその反例はそれぞれ全体の 40%以上を占めている。特に hin-に顕著なのは、原点を占める登場人物の移動に伴い物語場面自体も移行する事例である。(4)の hinaus は、登場人物 er が冬の屋外へ移動する方向を表すが、後続の文章において場面の描写も外へ移行する。つまり(4)の場合は登場人物とともに原点も移動しているため、(3)の hinaus に見られるような起点側の原点から離れる描写とはいえない。

- (4) In seinen Mantel gehüllt, ohne den Wagen abzuwarten, stürzte er sich in die scharfe Winternacht hinaus. Da freute er sich, wie draußen fern und nah die Turmuhren verworren zusammenklangen im Wind, und die Wolken über die Stadt flogen und der Sturm sein Reiselied piff, lustig die

Schneeflocken durcheinanderwirbelnd:[...] (SD:21-22)

マントをはおり、馬車を待とうともせず、彼は酷寒の冬の夜へと走り出た。外はすばらしかった。遠近の塔の時計が、風のなかで入り乱れて時を告げ、上空には雲が飛ぶように流れ、嵐が舞い下りる雪片を陽気に吹き散らし渦巻かせながら、ひゅうひゅうと旅の歌をうたっていた。(省略) (197)

こうした用例は、hinab, hinunter, hinauf, hinaus, hinein の広範囲にわたり、合計 10 例で全用例数の 25.6%と高い割合を占めている(瀧田 2021 :29)。本論文ではこのような原点移動の方向を示す hin-の事例を対象とする。また本論文では原点を指示場の中心（主として物語場面の中心）と規定するが、実は「原点 Origo」に関しては様々な見解がある。まず 2 では、この概念を提唱した Bühler(1934/1982)とそれに関連する学説を取り上げ、本論文における「原点」を位置づける。3 では、西郷(1975)の視点論に基づいて原点移動のメカニズムを分析する。4 では原点移動の類似現象として、三上(1955/1972) の指摘するソ系の「移動的に設定された原点」及び西郷(1981)の指摘する接続詞の予告機能を取り上げ、その汎用性を明らかにし、5 でまとめと今後の課題を提示する。

2. 本論文における「原点」とその背景

Ehlich(1985)は、Allewyn(1957/1974)の Hier「ここ」に代わるものとして Origo「原点」を導入したが、Origo はもともと Bühler(1934/1982)によって提唱された概念である。

Bühler(1934/1982:102)は、指示場を座標に見立てると、指示場の中心は座標の「原点 Origo」に相当することから、指示場の中心を Origo と呼ぶ。

さらに Bühler(1934/1982:102)は、Origo の代わりに機能する語として三つの指示語 (hier「ここ」、jetzt「いま」、ich「わたし」) を挙げ、これらの指示語は、呼びかける相手に対して、発話の送り手の位置や発話時、そして送り手本人への注意を促すとする。しかしこの Origo を三つの指示語に結び付ける見解には、次のような反論がある。Sennholz(1985)は、Origo を具体的な発話の場所・時・担い手とは異なる理論的な前提とし、ダイクシス関係の出発点として発話状況に固定する役割を果たすものとする。Diewald(1991:31)も Origo を三つの指示語とは同一視してはならない抽象概念とする。また Diewald(1991:27-30)は、Origo が移動および変換が可能であり、話し手によって指定されるものとする。

本論文では「原点」を Bühler(1934/1982:102)による Origo の規定を踏襲した「指示場の中心」とし、特に物語場面の中心とすることから、Sennholz(1985)及び Diewald(1991)の指摘するように「ここ・いま・わたし」という発話の場・時・担い手から解放された抽象概念で、且つ移動・変換可能なものとする。

3. 分析：西郷(1975)の視点論による原点移動のメカニズム

移動する原点は、もはや登場人物の立場から場面の遠近を描写する視座とはなりえない。

(4)の hinaus における視座は、(3)の hinaus に見られるような原点を占める登場人物に結合するものではなく、当該の登場人物から解放され、これを観察の対象とする。この視座は原点を占める登場人物とともに新たな場面へ導かれるため、場面描写の遠近感は失われる。それにも関わらず登場人物が居合わせる場面の臨場感は保たれている。この奇妙な事態は、次の hin- の例にも同様に当てはまる。

(5) [...]; er stieg langsam hinunter wie ins Grab. Im Hofe blickte er noch einmal zurück, die Fenster des Grafen waren noch erleuchtet, man sah ihn im Saale heftig auf und nieder gehen. (SD:24)

(省略) レナルトは、墓穴に降りて行くかのように、ゆっくりと階段を下った。中庭でもういちどふりかえると、伯爵の部屋の窓はまだ明るく、部屋のなかを激しく行きつもどりつしている彼の姿が見えた。(200)

(6) In seinem Hotel aber fand er alles wie ausgestorben, der Kammerdiener war vor Langeweile fest eingeschlafen, die jüngere Dienerschaft ihren Liebschaften nachgegangen, niemand hatte ihn so früh erwartet. Schauernd vor Frost, stieg er die breite, dämmernde Treppe hinauf, zwei tief herabgebrannte Kerzen beleuchteten zweifelhaft das vergoldete Schnitzwerk des alten Saales, es war so still, dass er den Zeiger der Schlossuhr langsam fortrücken und die Wetterfahnen im Winde sich drehen hörte. (SD:22)

だが屋敷につくと、すべては死に絶えたかのようにだった。侍従は退屈のあまり居眠っているし、若い召使たちはそれぞれの情事を追って出かけていた。彼がこんなに早く帰って来るとは誰も思わなかったのだ。寒さにふるえながら、彼は薄暗い階段をのぼって行った。今にも燃えつきそうな二本の蠟燭が、古びた広間の金箔の彫刻をぼんやりと照らしている。あまり静かなので、時計の針がゆっくりと進む音や、風見が風に回る音が聞こえるほどだ。(197-198)

(7) Es war ein schöner, blanker Herbstabend, als er in der Ferne Paris erblickte; die Ernte war längst vorüber, die Felder standen alle leer, nur von der Stadt her kam ein verworrenes Rauschen über die stille Gegend, dass ihn heimlich schauerte. Er ging nun an prächtigen Landhäusern vorüber durch die langen Vorstädte immer tiefer in das wachsende Getöse hinein, die Welt rückte immer enger und dunkler zusammen, der Lärm, das Rasseln der Wagen betäubte, das wechselnde Streiflicht aus den geputzten Läden blendete ihn; [...](SD:19)

遠方に巴里を望んだのは、美しく輝く秋の暮れ方であった。刈入れはとっくに終わり、田畑はどこもがらんとしていた。ただ、街の方角から、静かな野を超えてただよってくる錯綜としたどよめきに、彼はひそかにおののくのだった。彼は郊外の幾多の壮麗な別荘を通りすぎ、高まりゆく轟音にますます近づいていった。行けば行くほど、家並みは暗く密集し、喧騒と馬車のとどろきが耳を聳し、飾りたてた店から次々に洩れてくる斜光が彼の目をくらませた。(省略) (194-195)

上記のような *hin-*の事例に関しては、原点とともに移動する登場人物を観察する視座を想定せざるを得ない。しかしその前後でごく自然に登場人物の立場から場面が描写されていることを鑑みるならば、原点におかれる視座も常にその機能を維持しているとも考えられる。文芸作品にみられるこのような視点の在り方について論じたものとして、西郷(1975)の視点論がある。

西郷(1975:148)は、視点の設定が構成にかかわるものであり、作者の観点（世界観、人生観、芸術観など）に基づくもので、それは対象の本質をどのように主題化するかということによって決まるとしたうえで、その実、作者は読者との関係を暗に想定したうえで視点をとるものとする。その視点論は、以下のように、「内の目」と「外の目」、及び「視点人物」という概念によって構成される。

(8) 小説を読んでいて、わたしたちはそこに描かれている人物なり情景なりを、じかにこの目で見てるように感じています、じつはそれは錯覚です。

小説にかぎらず、すべての文芸作品が、かならずある視点から—ということは、ある「だれ」かの目から—見えるように描いてあるということです。

文芸の世界が、その世界のなかに登場するある人物の目をかりて、内がわから描いてあるとき、それをその人物の《内の目》で見た世界といいます。そしてその人物を視点人物といいます。

文芸の世界をその外がわから、つまり、その作品に登場しない人物の目からとらえ描いてあるときには、それを《外の目》でとらえた世界と名づけます。（西郷 1975:21）

さらに西郷(1975:25-29)は、ある登場人物が「外の目」からも「内の目」からも描かれ、読者に共体験を促すケースを指摘する。その一例としては、父親が娘に話しかけるという設定の物語において、「話者（パパ）が、生まれてまもない」主人公を「《外の目》でとらえ、聞き手」である娘に物語る一方で（同書、p.26）、その場面の描写が主人公の主観（つまり「内の目」）を反映している事例が挙げられている（同書、pp.27-28）。

西郷(1975)の視点論における外の目と内の目による共体験のメカニズムは、移動する原点を伴う *hin-*の用法と共通するところがある。それは、ともにその作品に登場しない外の立場から原点となる登場人物が描写されるとともに、前後で描かれる情景はその登場人物の立場、つまり内の目からとらえられるという点である。

先述の(5)の *hinunter* は、登場人物 *er* の移動方向を表すが、この移動は描写の対象として外の目から描かれている。そして Hof「中庭」へ移動した後には登場人物 *er*（日本語訳「レナルト」）の立場、つまり内の目からみた *die Fenster des Grafen*「伯爵の部屋の窓」の様子が描写される。(6)の *hinauf* は *er* の階段を上っていく方向を表し、その移動は描写の対象として外の目から描かれる。しかしその移動直前には階下の様子がつぶさに描写され、移動直後は *tief herabgebrannte Kerzen*「燃え尽きそうなるろうそく」にぼんやり照らし出される階上の

Saal「広間」の様子が、その場にいる er の立場、つまり内の目からこまやかに描写されている。(7)の hinein は登場人物 er が高まりゆく Getöse「轟音」の渦中へ向かう方向を示し、その移動自体は描写の対象として外の目から描かれているが、移動以外の情景、移動直前の田園風景や郊外の様子、移動直後の街中の喧騒などの描写はそこに居合わせる登場人物 er の立場、つまり内の目から描かれたものである。

これらの事例は、hin-が表す方向の移動がいずれも外の目から描かれつつも、登場人物の内の目は維持されたままであり、hin-が用いられる文脈の直前直後で機能していることを示している。この視点のメカニズムにおいて、内の目及び視点人物は場面の中心たる原点に位置づけられ、外の目は場面の中心たる原点の移動を描写する視座となっている。

4. 考察：原点移動の類似現象とその共通特性

3 では、本論文で対象とする hin-の原点移動に類似すると思われる現象を取り上げ、その共通特性を示すことにより、原点移動の汎用性を明らかにする。

4.1. 三上(1955/1972)：ソ系の文脈承前における「移動的に設定された原点」

三上(1955/1972:177)は、大部分のコソアドの用法を直接指示(demonstrative)としたうえで、特にソ系の文脈承前(anaphoric)、つまりいわゆる文脈指示、照応の用法に着目する。この文脈承前の解説は、原点移動の hin-に酷似した特徴を提示しているが、元々は、佐久間鼎による次の文脈指示的な用法の言及を受けて、さらに根本的に考察したものである。

(9) 話の進行の中では、「それ」とか「その」とか「そこで」とか「その時」とか、いう文句がよく使われますが、これは、対話の際相手のいう事をこういう語でさすのと同趣のものと思います。(中略) もちろん前に述べた事柄や品物をさすのに「それ・その」などを用いる場合は、たくさんありますので、話し相手だけに限ることは出来ませんが、こういう場合に、ある程度までは「これ・この」などでさすことも出来るようです。しかし大体、眼前の事象をさして「これ・この」を用いるのに対し、話された事件などで現に相手との間に話題になっている場合には、「それ・その」でさすのが普通で、また自然でしょう。(佐久間鼎『現代日本語の表現と語法』p.24) (三上 1955/1972:176)³

三上(1955/1972)は、上記のように相手との関係を考慮に入れたうえで、文脈承前の成立を、楕円的、円の二つの場面の様式に基づいて段階的に説明する。まず楕円的とは、相手と話し手とが楕円の二つの焦点に立ち、楕円を折半してめいめいの領分として向かい合う

³ 『現代日本語の表現と語法』には複数の版があるが、三上(1955/1972)にはその出版年が明記されていない。三上(1953/1972:5)の記述によると 1936 年出版のものとも推定されるが、該当箇所(9)の記述はない。他方 1951 年出版の改訂版及び 1966 年出版の増補版の該当ページには(9)の内容が記載されている。以上のことから、引用の記述(句読点、改行、強調等)はすべて三上(1955/1972:176)に従った。

原始的な対立の様式であり、ソ系とコ系が対立しア系は問題外である（同書、p.177）。円的とは相手と話し手が「我々」として心的な領分を共有する場面の様式で、円内はコ系、円外はア系であり、ソ系の領分は没収される（同書、p.178）。三上(1955/1972:179)は、この領分を没収されたソ系が「指示作用を失って、文脈承前の働きをするようになった」中称であり、それは「遠近の中間の中ではなく、中和中立の中称である（強調は本論文著者）」とし、文脈指示用法に遠近感がないことを指摘する。さらに三上(1955/1972:179-180)は、「円的な内外自他の対立は話手の指定する地点に移すことが可能で」あり、「もはや指示領分を持たない」ソ系は「話手の指定のままに使われる。移動的に設定された原点がソコであり、ソレである（強調は本論文著者）」と説明する中で、文脈承前のソ系の指示対象をくしくも「原点」と呼び、しかもそれが「移動的に設定された」ものとしている。このように三上(1955/1972)は、文脈承前のソ系について、hin-の用法にも見られる遠近感の喪失と移動的原点という特徴を指摘している。

三上(1955/1972)の問題点は、文脈承前の例として、(10)のように話し手自身の先行発言を指すもののほかに、(11)のように相手の発言を指すものも挙げていることにある。(10)は文脈指示に特化された用法であるのに対し、(11)は話し手と対立するソ系の要素が崩れかけ、形式化の傾向を示している（同書、pp.178-179）とされてはいるものの、文脈承前の用法が楕円の様式から円の様式への移行したうえで生じると説明するのであれば、(11)のような相手に対立する楕円形様式を前提とする文脈承前は理論上矛盾する。

(10) アイツヲ呼ンデ来テ、ソイツ（つまりアイツ）ニヤラセテミルカ？（同書、p.179）

(11) 君ガソウ言ウンナラ、ソンナラアキラメルヨ（同書、p.178）（強調は原著者）

さらに三上(1955/1972)の解説を補足すると、文脈指示のソ系が指すのは、発話時の原点ではなく先行・後続文脈の原点である。前方照応の場合は、ソ系の指示対象である先行文脈の原点が現在の原点に移行しており、後方照応の場合は、現在の原点がこれからソ系の指示対象である後続文脈の原点へ移行する。つまり先行・後続文脈の原点を中称のソで指すことにより、原点の移動が示されるのである。例えば瀧田(2024:123-124)は、漫画のナレーションの例(12)において文脈指示のソ系の指示対象がその直前直後の絵（コマ）の中心を占めていることを指摘する。つまり(a)の「そこ」は後述の「デスノート」を指す後方照応で、直後のコマには当該の「デスノート」が描かれている。(b)の「それ」は(a)の「デスノート」を指す前方照応で、コマにはそのノートに名前を書いている登場人物「夜神 月」の姿が描かれている。(c)の「それ」は(b)の「夜神 月」の行動を指す前方照応で、コマにはその「夜神 月」の姿を眺める「死神 リューク」が描かれている。

(12) (a) そこに/ 名前を書かれた者は/ 死んでしまう/ デスノート//

(b) それを武器に/ 世の中の悪を一掃すると/ 決心した少年/ 夜神 月//

(c) そして それを/ ただ傍観している様な/ デスノートの提供者/ 死神 リューク//⁴
(『デスノート』 p.53 強調は瀧田(2024)による)

4.2. 西郷(1981)：接続詞の予告機能

文脈指示のソ系（特に「それ」「その」）は、「それというのも」、「それでいて」、「それを、それが（逆接）」など多くの接続表現に用いられる（金水・木村・田窪 1989:75）。これに関連の深い接続詞に関して、西郷(1981)はその予告機能に着目する。

西郷(1981)は、文芸作品の文章をより豊かに深く読むための文法の再検討を試み、その一つとして接続詞を取り上げる。西郷(1981)は、従来の文法で接続詞が「前文と構文の意味関係を規定するものと考え、そのように定義」されており、「まさに「接続」あるいは「つなぎ」という名称にそれが如実に示されてい」る（同書、pp.9-10）が、「あらゆる文章表現（文芸の表現をふくめて）の本質に立って考えてみると、接続詞とは、「接続」「つなぎ」という考え方より、「予告する」「方向指示する」というふうにかえた方がいいように思われる」と述べ（同書、p.10）、次のように説明する。

(13) たとえを引いて述べてみます。私たちが車を運転するとき、十字路にさしかかったとします。かりに右折するとすれば方向指示器（テール・ランプ）によって右折することを後続車に対して予告します。後続車は右折のサインを受けて、心づもり、心がまえをしますから、思いがけないトラブルをさけることができるでしょう。

すべて表現（文章）というものは相手あつての表現です。私は話す場合でも、書く場合でも、相手のことを意識しつつ、おのれの述べたいことを表現していきます。その際、これまで述べてきたことを否定、打ち消すことをこの後述べるとすれば、あらかじめ相手に対して〈しかし〉〈でも〉とその旨をサインとして出します。相手は、このサインを受けて、心づもり、心がまえをするはずで、とすれば当方のこれから述べようとすることを早合点したり、誤解したりすることを避けられるはずで、

（西郷 1981:10）

この西郷(1981:10)の記述によると、接続詞は単なる「つなぎ」ではなく、「方向指示器」のような予告機能を持つが、このように相手を誘導するナビゲーション機能は、原点移動を伴う hin-と文脈指示のソ系にも当てはまる。受け入れ側は、これらの表現が原点移動を担っていることに気づくことにより迷うことなく次の場面に移行することができる。両者はさらなる機能も果たす。文脈指示のソ系は、慣用化した接続表現となる場合、接続詞と同様に順接や逆接などの予告機能を持ち、hin-には上下内外などの方向を表す後続の構成要素(-ab,

⁴ 漫画『デスノート』のナレーションや会話文は、枠内に収められ句読点は用いられていない。そのため改行を「/」、枠の分割を「//」で表示した。またふりがなは全て省略した。

-auf, -aus, -ein 等)により、より限定された方向に導く機能がある。

このように原点移動を伴う hin-及び文脈指示のソ系には、テキストを受け入れる側を誘導する方向指示の機能を果たすが、それは、原点からの遠近関係をとらえる内の目からの描写ではなく、原点から解放され全体を見渡す外の目からの描写だからこそ実現すると考えられる。

5. まとめと今後の課題：原点移動と照応

本論文では、原点移動を伴う hin-の用法を対象として、西郷の視点論に基づいて分析し、三上(1955/1977)の指摘するソ系の文脈承前と西郷(1981)の指摘する接続詞の予告機能との共通点を考察した。その結果、原点移動を示す hin-と文脈指示のソ系にも、遠近感の喪失と原点移動と見なされる特徴があり、さらに接続詞と同様にナビゲーション機能も果たすことが示され、原点移動の汎用性が明らかになった。

原点移動の汎用性について西郷(1975)の内の目と外の目を取り入れて考えると、さらに興味深い知見が得られる。Alewyn(1957/1974)の指摘する風景描写は、登場人物の内の目からとらえた遠近感によるところが大きい。それに対して本論文で取り上げた原点移動は、その運動をいわば登場人物以外の立場である外の目から、つまり登場人物が属する場面を超越した広い視野からとらえるものであるがゆえに、遠近の消失に伴い、原点移動の観察とその移動を予告し読者を導くナビゲーションが可能になる。三上(1955/1972)の円的様式はコ系とア系が対立する遠近感の際立つ場面である。そこにはコ系の指示領域の中心となる者、つまり話し手(と相手)の内の目が機能している。それに対して原点移動を伴う文脈指示のソ系には、いわば場面を超越し文脈全体を見渡す外の目が機能している。

この観点を延長させて考えるならば、場面の内の目からの遠近感をもつ風景描写は、遠近の対立するダイクシス現象、つまり日本語指示詞のコ系とア系の対立に結び付く描写であると考えられる。それに対して場面を離れた外の目による超越的な原点移動の描写は、文脈全体を見渡す照応にかかわる描写であるとみなすことができる。今後は、こうした内の目と外の目という視点がダイクシスと照応にどのように関与するかを検討していきたい。

参考文献

- Alewyn, Richard (1957/1974): Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: *Probleme und Gestalten: Essays*, Frankfurt am Main: Insel, pp. 203-231. (Erstdruck: *Euphorion* 51, 1957, pp. 42-60.) (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984年, pp. 303-340.)
- Bühler, Karl (1934/1982): *Sprachtheorie: Die Darstellungsfunktion der Sprache*. Stuttgart, New York: Fischer, 1982 (Nachdruck von 1934). (脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論 言語の叙述機能 上巻』クロノス, 1983.)
- Diewald, Gabriele Maria (1991): *Deixis und Textsorten im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.

- Ehlich, Konrad (1985):** Literarische Landschaft und deiktische Prozedur: Eichendorff. In : Schweizer, Harro (Hg.): *Sprache und Raum*, Stuttgart: Metzler, pp. 246-261.
- Sennholz, Klaus (1985):** *Grundzüge der Deixis*. Bochum: Brockmeyer.
- 金水敏・木村英樹・田窪行則(1989):**『日本語文法 セルフマスターシリーズ 4 指示詞』くろしお出版.
- 西郷竹彦 (1975):**『西郷竹彦文芸教育著作集 第 17 巻 文芸学講座 I 視点・形象・構造』明治図書
- 西郷竹彦(1981):**『西郷竹彦文芸教育著作集 第 4 巻 文芸の言語・文法教育』明示図書
- 佐久間鼎(1936):**『現代日本語の表現と語法』厚生閣
- 佐久間鼎(1951):**『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』恒星社厚生閣
- 佐久間鼎(1966):**『現代日本語の表現と語法 (増補版)』恒星社厚生閣
- 瀧田恵巳(2018):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 1)」『言語文化共同研究プロジェクト 2017・時空と認知の言語学Ⅶ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2019):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 2)」『言語文化共同研究プロジェクト 2018・時空と認知の言語学Ⅷ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2020):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 3)」『言語文化共同研究プロジェクト 2019・時空と認知の言語学Ⅸ』 pp. 1-10. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2021):**「『デュランデ城』における風景描写のダイクシス (その 4)」『言語文化共同研究プロジェクト 2020・時空と認知の言語学Ⅹ』 pp. 21-30. 大阪大学大学院言語文化研究科
- 瀧田恵巳(2024):**「ダイクシス表現の分類における人称の位置づけについて」『大阪大学 大学院人文学研究科紀要 第 1 巻』 pp. 99-133. 大阪大学大学院人文学研究科
- 三上章(1953/1972):**『現代語法序説』くろしお出版 1972 (底本:『現代語法序説』刀江書院 1953)
- 三上章(1955/1972):**『現代語法新説』くろしお出版 1972 (底本:『現代語法新説』刀江書院 1955)

例文出典

- Eichendorff, Joseph von : *Das Schloss Dürande*. Stuttgart: Philipp Reclam jun. , 2011. [略号 SD]
- アイヒェンドルフ, ヨーゼフ・フォン (渡辺洋子訳):「デュランデ城」 前田道介編『アイヒェンドルフ (ドイツ・ロマン派全集第六巻)』国書刊行会, 1983, pp.175-228.
- 大場つぐみ (原作)・小畑健 (漫画) (2004):『DEATH NOTE デスノート』第一巻 集英社 [略号『デスノート』]

認知音韻論の発展に向けて： 日本語の VOT とアクセント移動を事例に

田村幸誠* 松浦幸祐**

1. はじめに

本稿は、認知言語学による音声・音韻分野の分析や考察の一例を提案するものである。Langacker (1987: 1.1.2; 2008: 2.1.1) などで提唱されているように、認知言語学は、形態や統語、意味といった各ドメインに対して、共通の原理や認知能力から説明や理論化を行う点に特徴がある。しかし、認知言語学によるこれまでの研究は、意味・文法の分野におけるものが中心的であり、音声・音韻分野に関しては、それほど多くの研究が蓄積されていないように思われる。

本稿の目的は、以上の問題点を背景として、これまで文法や意味の分析に用いられることの多かった認知言語学の諸原理が、音声・音韻における現象の分析にも観察されることを、日本語の2つの音韻現象の分析を通して具体的に示すことにある。その中で、日本語における VOT (Voice Onset Time) の変化 (高田 2011, 佐藤利男 1958 など) は、認知言語学における「主観化 (subjectification)」現象のごく初期段階と捉えられること、また、日本語のアクセント核の移動現象 (横谷 1997 など) には、胸骨舌骨筋の衰退という機能的動機づけを与え得ること、この2点を考察したいと考える。

以下、第2節で認知言語学の基本的な考え方として、機能主義的言語観と記号的文法観について振り返った上で、第3節において、日本語の語頭閉鎖音における VOT の変化とアクセント核の移動現象の分析を例に、認知言語学の概念が有用に働くことを示す。

2. 理論的背景

まずは、認知言語学における2つの基本的な考え方として、機能主義 (functionalism) と記号的文法観 (symbolic view of grammar) という考え方を簡単に振り返ろう。

2.1. 機能主義的言語観

認知言語学の考え方の1つとして、言語を機能的な存在と捉える点が挙げられるが、本節では、「functional、つまり関数的」な言語観が具体的にどのようなものであるかを考察しよう。「関数的」とは、一言で言えば、図1や図2に示されているように、あるドメイン (domain) の値が、異なるドメイン (co-domain) の値と写像 (mapping) の関係にあることを意味する (Lakoff 1993:118)。そのような対応を持つ基本的な例として、数学における関数 (function) が挙げられる (図1)。例えば、 $y = 3x + 1$ によって定義される関数 f を考えた場合、この

* 大阪大学 人文学研究科 言語文化学専攻; e-mail: tamura.yukishige.hmt@osaka-u.ac.jp

** 大阪大学 日本語日本文化教育センター; e-mail: matsuura.kosuke.cjlc@osaka-u.ac.jp

関数 f は、ドメイン X における $x = 1, 2, 3, \dots$ という値が、ドメイン Y においてそれぞれ $y = 4, 7, 10, \dots$ という値と写像的対応（一対一の関係を作ること）を有することと同義であると見ることができる。

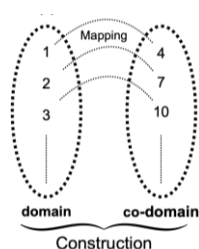


図 1：関数 $y = 3x + 1$ における写像関係

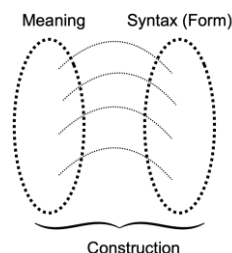


図 2：意味と形式における写像関係

このような機能的／関数的な対応が言語に現れる一例として、図 2 のような、意味と形式の写像関係が挙げられる。図 2 で意図していることは、図 1 の写像と平行的に、意味ドメインにおける特定の値（すなわち、概念化を経た具体的な意味や状況）に対して、形式ドメインにおける特定の値（すなわち、具体的な構文の形式）が対応するというものである¹。

認知言語学的な分析が図 2 のような機能主義の立場であることを、英語の受動文の分析を例に考察してみよう。例えば、(1a) の能動文と (1b) の受動文は、それぞれ異なる形を有している（つまり、形式ドメインにおいて異なる値をとっている）。機能主義的な観点からその理由を説明する場合、そもそも意味ドメインでの値が異なる（つまり、両者は異なる意味を表している）からであるということになる。より具体的に言えば、(1a) で表される意味は、行為の動作主（Agent）である John を力関係の始点とし、その影響力の行使がボールに及ぶという捉え方であるのに対して、(1b) の意味は、動作主が事態の焦点から外れ（defocus; Shibatani 1985: 832）、あくまでボールの状態に意味の焦点があるという捉え方であるため、その意味の違いに対応して、能動文と受動文という異なる形式が用いられていると考えるのである（図 3）。このような分析は、例えば意味を厳密に真理条件的なものとして捉え（つまり、(1a) も (1b) も客観的に同じ意味を表していると考え）、(1a) と (1b) の関係を形式ドメイン内のみで生じる変形や派生によって捉えようとする形式主義的なアプローチとは大きく異なっていると言えよう。

¹ 以下に示す Bolinger (1977) の有名な「形が違えば意味も違う」という言語を分析する際の基本的な着眼点も関数の関係を表したものであると言える：“[T]he old principle that the natural condition of a language is to preserve one form for one meaning, and one meaning for one form.” (Bolinger 1977:x (preface)). 言い換えれば、Lakoff (1993) の構文 (construction) の考え方の着眼点と発展性は先の Bolinger のように従来の機能主義で採用されていた考え方を「関数」というより抽象的な理論的構築物に帰結させ、その結果、従来の「意味と形式の関係」だけでなく、メタファー（ソース・ドメインとターゲット・ドメイン）、音声（音声学的なドメインと音韻的なドメイン）と様々な領域でこの関数的原理（構文）が汎用的に用いられていることを明示した点にあると言える。

- (1) a. John kicked the ball.
b. The ball was kicked by John.

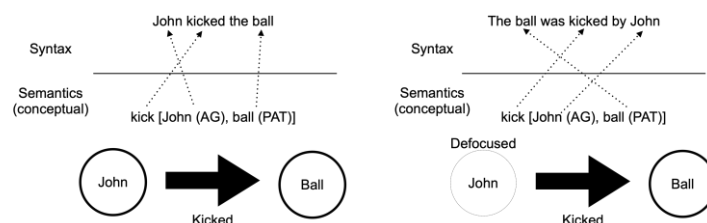


図 3 : (1a) と (1b) における写像関係の違い

2.2. 記号的文法観

認知言語学におけるもう 1 つの基本的な考え方として、記号的文法観 (symbolic view of grammar; Langacker 1987, 2008)、とりわけ、図 5 に見られるように、文法における意味と音韻を平行的に捉える見方が挙げられる。ここでのポイントとして、Langacker (1987, 2008) による記号的文法観では、音の記述・分析も、意味の記述・分析と同じ理論的概念で行えること、より正確に言えば、音や意味といった特定のドメインに縛られない、一般的な認知能力によって言語の諸側面を記述・分析することが想定されている点に着目されたい (図 4) (Lakoff 1993:118)。

しかし、例えば Langacker (2008) では、意味と概念化の関係 (図 4 の Semantic Unit と Conceptualization) については具体的な分析例が豊富に扱われている一方で、音韻と音声の関係 (図 4 の Phonological Unit と Vocalization) については、あまり多くの具体的な分析例は挙げられておらず、他の認知言語学的研究においても、音の分野を扱ったものはそれほど多くないと言える (例えば、Evans and Green 2006 の認知言語学の入門書は全 830 ページある大著だが、音声音韻に関して独立した節や章はない。また、Geeraerts and Cuyckens 2007 も 1334 ページあるが、音韻に関するものは Nathan の論文 1 本のみ (21 ページ) である。つまり、意味極に関する研究が大変活発であるのに対して、音韻極に関しては研究の蓄積がほぼないと言って良いくらいの差が存在する)。

次節からは、このような問題点を背景として、音声・音韻分野の分析や議論が、意味・文法分野における議論と平行的に行えることを、具体的な分析を基に示そう。

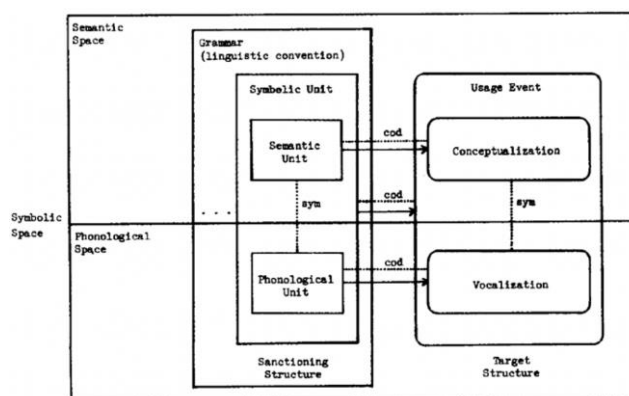


図 4：記号的文法観（Langacker 1987: 77）

3. 日本語の音韻現象に対する認知言語学的考察

それでは、認知言語学的の諸概念、特に、「主観化」と「機能的動機づけ」という 2 つの概念が、日本語の音韻分野の分析においても重要な役割を果たすことを見ていこう。以下、3.1 節では、日本語の語頭閉鎖音における有声カテゴリーの変化が、主観化という概念によって適切に説明できることを示す。3.2 節では、日本語の無声化母音におけるアクセント核移動現象に対して、機能的動機づけを与え得ることを示す。

3.1 「主観化」から見る日本語語頭閉鎖音の有声性

まずは、「主観化（subjectification; Langacker 2008 など）」に着目し、このプロセスが意味の領域だけでなく、音韻の現象に対しても有用な説明を与えることを観察していく。以下では、英語の *be going to* における意味変化／多義を例に、主観化のプロセスを簡単に振り返る。その上で、Ohalá (1993) による記述から、声調の音韻化プロセスを概観し、それが主観化の一種として位置付けられることを述べる。さらに、日本語においても、高田 (2011) や佐藤利男 (1958) の研究を基に、声調の音韻化プロセスの初期段階と言い得る現象が観察できることを議論する。

まず、認知言語学における主観化とは、ある意味や事態に内在的であった心理的走査（mental scanning）が前景化することを指す（詳しい議論は Langacker 1990, 1999, 2008 等を参照されたい）。例えば、英語の *be going to* を用いた (2) の文には、(2a) のような、動作の主体（ここでは Tom）が目的の動作（ここでは手紙を出すこと）を行う意図を持ちながら、物理的に郵便ポストに向かって空間を移動する意味と、(2b) のように、Tom が実際に移動を行うとは限らず、単に未来の時間において手紙を出す意味があり得るが、このとき、(2b) の意味は (2a) に主観化が生じたものと捉えられる。つまり、(2a) の表す物理的移動を認識する際においても、認知主体はそれと同時に動作の展開する時間軸を心理的に走査していると考えられ、(2b) はその走査プロセスが前景化したもの、つまり、時間的未来の意味を表すようになったものであると分析できるのである。

- (2) Tom is going to mail a letter. (Langacker 2008: 538)
- a. Tom's spatial motion toward a goal with the intent of mailing a letter upon reaching it.
 - b. Tom will mail a letter (perhaps just by clicking a mouse).

主観化のプロセスを上記のように理解した上で、次に、音韻ドメインにおける主観化と考えられる現象を、Ohala (1993) による声調の発達プロセスに関する議論を基に考察しよう。Ohala によれば、声調の区別を有する言語の中には、その区別の出自として、子音の有声・無声の区別に由来するものがあるという。例えば、(3) に示したように、Kammu 語では、「鷲」と「石」という語を区別する際、比較的新しい形を持つ Northern Kammu においては声調による区別 (*kláaŋ* vs. *klàaŋ*) を行うのに対して、より古い形を残している Southern Kammu では、同じ語が語頭子音の有声性によって区別 (*klaaŋ* と *glaaŋ*) されているのである。

Ohala は、Kammu 語のように有声・無声の対立から声調が生じるプロセスを、次のように説明している。すなわち、無声子音と母音からなる音節（例えば /pa/）を発音しようとする時、発声器官の構造上、有声子音の音節（例えば /ba/）に比べて、相対的に高いピッチで母音を発音することになり、その母音は、必然的に図 5 のように下降調の音程を伴って発音される傾向にある。反対に、有声子音の音節では、相対的に低いピッチで発音が始まり、後続する母音はわずかな上昇調のピッチを伴うこととなる。この随伴的な音程の高低が音韻としての区別を有するようになる（すなわち、音の高低が音韻化する）ことで、Northern Kammu のような声調が定着するということである (Ohala 1993: 240-241)。

(3) Southern Kammu	Northern Kammu	Translation	
<i>klaaŋ</i>	<i>kláaŋ</i>	eagle	
<i>glaaŋ</i>	<i>klàaŋ</i>	stone	(Ohala 1993: 240)

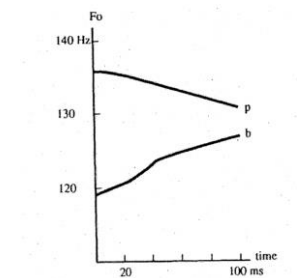


図 5： pa と ba の発音におけるピッチの変動 (Ohala 1993: 241)

Ohala (1993) による以上の議論は、(2) の *be going to* の例で見た主観化のプロセスと並行的に捉えられる。つまり、認知の主体は、例えば /pa/ や /ba/ という音声を認識する時、その調音に随伴する音程の高低や下降調・上昇調も併せて心理的走査の対象としており、声

調の音韻化とは、その走査プロセスが前景化したものと考えることができる。

主観化の現象が意味・音韻のドメインを問わず生じることを確認した上で、続いて、日本語の語頭閉鎖音における有声性カテゴリの変化にも、主観化のごく初期段階と言い得る現象が生じていること、具体的には、頭子音の VOT（Voice Onset Time）による弁別だけでなく、後続母音のピッチパターンによる区別が発生しつつあると言い得ることを見てみよう。そのためにも、まずは高田（2011）や佐藤利男（1958）などによって指摘されている、日本語の語頭閉鎖音における VOT の通時的変化について説明する。

高田（2011）は、表 1 に挙げた語を分析の対象として、表 2 の 2 つの音声資料から日本語の語頭閉鎖音における VOT を調査した結果、日本語の有声カテゴリは少なくとも VOT のみでは区別し難くなっている可能性を指摘している。その通時的変化をまとめたものが図 6 である（各グラフとも、実線は有声音を発音した際の値、点線は無声音を発音した際の値を表し、横軸は VOT（ms）を、縦軸はその相対度数分布を表す。また、グラフ内の「○○年代」は話者の生年代を表す）。まず、1910 年代以前に生まれた話者によるデータを見ると、近畿出身者（a1）では、有声音の VOT と無声音の VOT がはっきり分かれており、東北出身者（b1）においても、有声音の VOT の値が一部、無声音の値と重なってはいるが、ピークは独立して有しているため、近畿の話者においても東北の話者においても、VOT による有声性の判断は可能であったとされる（高田 2011: 144）。

		後続母音				
		/a/	/e/	/o/	/i/	/u/
頭子音	/b/	/baka/(馬鹿)	/bero/(べろ)	/boro/(ぼろ)	/biwa/(琵琶)	/buta/(豚)
	/d/	/daŋgo/(団子)	/deguti/(出口)	/doku/(毒)		
		/daikoN/(大根)		/do:zo:/(銅像)		
	/g/	/ga/(鰻)	/geta/(下駄)	/go/(五)	/giN/(銀)	/guNkaN/(軍艦)
	/p/	/paN/(パン)	/peN/(ペン)	/posuto/(ポスト)	/piN/(ピン)	/puopera/(プロペラ)
	/t/	/ta/(田)	/te/(手)	/to/(戸)		
		/taiko/(太鼓)		/toke:/(時計)		
	/k/	/ka/(蚊)	/ke/(毛)	/ko/(子)	/ki/(木)	/ku/(九)

表 1：全国高校録音資料の分析対象語²

音声資料名	収集期間	収集者	分析対象者の生年代	分析対象人数
全国高校録音資料	1986～1989 年	井上史雄	1910 年代～1970 年代	443 名
指標地域録音資料	2006～2007 年	高田三枝子	1910 年代～1980 年代	456 名

表 2：高田（2011）の分析資料

² 指標地域録音資料では、/to/ の分析語のみ「時計」ではなく「冬至 /to:zi/」である。

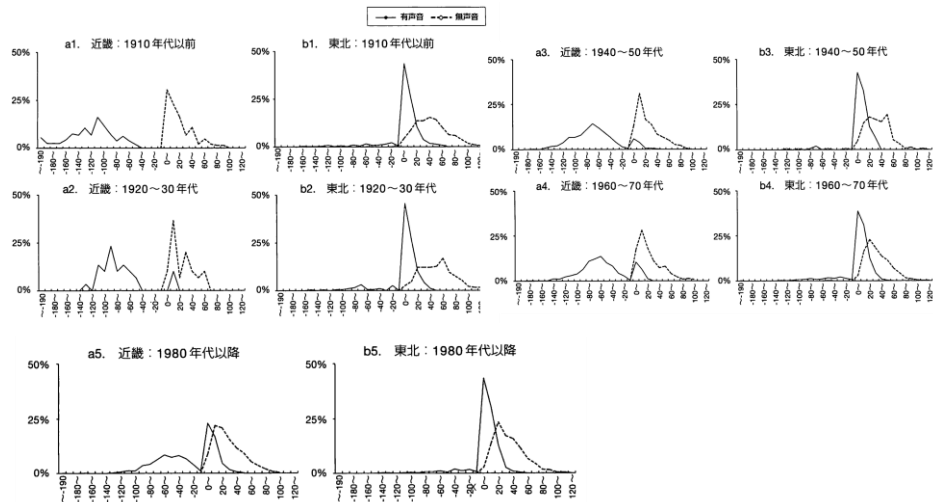


図 6：日本語の近畿方言と東北方言における語頭閉鎖音の VOT の変化（高田 2011: 145）

これに対して、世代を経ると、近畿においても、東北においても、次第に有声音と無声音の VOT の値が一点に収斂し始め、VOT による有声音の弁別が難しくなっていることが読み取れる。近畿出身者（a2-a5）で言えば、有声音の VOT の値が大きくなり、そのピークがプラス方向（図内の右方向）へと移ることで、無声音の VOT のピーク（0ms 付近）に近づいている。また、東北出身者（b2-b5）においては、無声音の VOT の値が小さくなり、有声音の VOT のピーク（同じく 0ms 付近）に近づく変化が読み取れる。

以上の事実を踏まえた上で、高田は、日本語の有声性カテゴリの音韻的区別が VOT 以外の要因、具体的には、後続母音におけるピッチ（F₀）のパターンによってなされている可能性を示唆している。このことを理解するために、以下では、佐藤利男（1958）による実験結果の一部を参照しよう（同様の主張として、ほかに清水 2000 や佐藤大和 1974 などがある）。

佐藤の主張は、日本語の語頭閉鎖音における有声知覚には「ピッチ周波数の上昇変化が[...] かなりの貢献をなしている」という点にある（佐藤利男 1958: 121）。この主張を裏付ける実験結果として、佐藤は、無声閉鎖音と母音からなる音節（/ka/ /ta/ /pa/ など）を発音した際には、その母音のピッチにおいて、「始め高く次第に降下する傾向」が見られ、反対に、有声閉鎖音と母音からなる音節（/ga/ /da/ /ba/ など）を発音した際には、その母音のピッチに「低いところから高いほうに移行する」傾向が見られることを示している（佐藤利男 1958: 120（図 7））。さらに、図 8 のように、/ka/ /ta/ /pa/ の発音の冒頭 20ms を、ピッチが上昇傾向にある母音 /a/ に結合させて被験者に聞かせると、被験者の 40–60% は、その音声を有声音として知覚する傾向が見られたという。

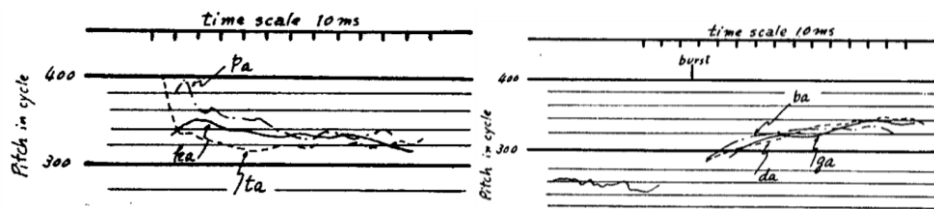


図 7： pa と ba を発音した際の母音 a におけるピッチの動き（佐藤利男 1958: 120）

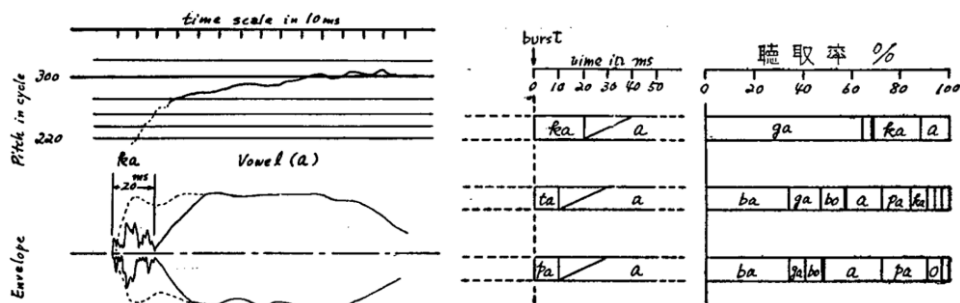


図 8：無声音の音声と上昇調の a を結合させた時の知覚（佐藤利男 1958: 121）

さらに、高田と佐藤による以上の指摘は、先に見た Ohala (1993) の Kammu 語の例とよく似た現象（主観化／音韻化のプロセス）が日本語でも観察されるということを超えて、声調の主観化／音韻化の度合いによって言語を類型化できる可能性があることを意味する。Hyman (1984) によれば、声調の音韻化には、図 9 のように、3 つの段階、すなわち、Stage I（ピッチの高低は子音の有声性に内在的（intrinsic）である段階（話者はその差があることを気づいていない段階））、Stage II（ピッチの高低が誇張を伴って発音され、子音の有声性から外在的（extrinsic）になる段階（話者はその差には気づいているが、その差が弁別的な対立になっていない段階））、Stage III（/p/ と /b/ の弁別が失われ、成長としての音の高低によって音韻の区別が可能（phonemic）になる段階）が区分できるとされる。このうち、すでに見たように、Northern Kammu は Stage III の段階にあり、日本語は Stage I から Stage II へと移行する途中段階であると言えよう。

Stage I	>	Stage II	>	Stage III	
pá [—]		pá [—]		pá [—]	(') = high tone
bá [—]		bă [—]		pă [—]	(˘) = rising tone
'intrinsic'		'extrinsic'		'phonemic'	

図 9：声調の音韻化に見られる 3 段階（Hyman 1984: 69）

3.2. 日本語のアクセント核移動に対する機能的動機づけ

2 つ目の分析事例として、第 2 節でも見た認知言語学の主要な概念である「機能的写像関係」が音声・音韻ドメインにおいても観察されること、特に、日本語におけるアクセント核

の移動現象が東京方言と大阪方言で異なる音韻的振る舞いを見せる理由に説明を与え得ることを議論しよう。以下、東京方言におけるアクセント核移動現象を概観した上で、それが大阪方言では生じないことを確認し、この方言間の音韻的違いが、胸骨舌骨筋の衰退（杉藤 1982）という音声学的要因に求められ得ることを示したい。つまり、東京方言のアクセント核移動を引き起こす要因に関しては、(i) 母音の無声化に加えて (ii) 胸骨舌骨筋の運動の弱まりという 2 つの弱化（lenition）によって支えられた現象であることを考察する。

第 2 節で確認したように、認知言語学では言語の諸側面をドメイン間の写像として捉えるため、例えば英語において能動文と受動文が異なる形式をとる（つまり、形式ドメインにおいて値が異なる）理由として、それに対応する意味ドメインの値が異なるためであると説明する。ここで重要な点は、音声・音韻においても、図 10 のような写像関係が想定できる点である。つまり、音声ドメインにおける値（音の物理的な特徴の差）が音韻ドメインにおける値（カテゴリとしての個別の音韻概念）に対して写像的対応を有する関係になっているということである。

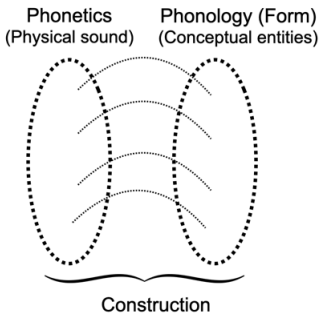


図 10：音声・音韻における写像関係

以上を踏まえた上で、日本語におけるアクセント核の移動現象について説明する。横谷（1997）や秋永（1985）で指摘されているように、日本語の東京方言では、アクセント核を担う母音が無声化した際、そのアクセント核が 1 つ隣の拍に移動する。例えば、(4a) に見られるように、日本の県名には、「県」の直前にアクセント核を有するという規則性が観察されるが、(4b) のように、「県」の直前の拍が無声化すると、アクセント核が 1 拍ずれる現象が観察される。同様に、(4c) の「低空飛行」においても、元々 5 拍目にあったアクセント核が 6 拍目にずれている。

- (4) a. wakayama'-keN (和歌山県 LHHH-LL)
 b. yamaguti'-keN → yamagu'tj-keN (山口県 LHHH-LL → LHHL-LL)
 c. teikuu-hi' kou → teikuu-hjko'u (低空飛行 LHHH-HLL → LHHH-HHL)
 (例は横谷 1997: 56 より；表記を改めた)

この現象に関する先行研究では、もっぱら形式的側面、特に、アクセント核の移動先を正しく予測することに関心があったと言える。例えば、Yamada (1990) や Haraguchi (1991) の主張は、(4b) のようなアクセント核の移動は、フット (foot) を音韻論的構成素として導入することで正しく予測できるという点に眼目があり、その主張の発展形に位置付けられる横谷 (1997) も、フットより大きな「大フット (super-foot)」という単位を導入することで Yamada らの説明を拡張しようとしたものであると言える。

ただし、ここでの目的は、上記の先行研究を批判的に検討することよりも、そもそもなぜ、母音の無声化によってアクセント核の移動が生じるのかという点を考察する点にある。そのような考察が要請される背景として、例えば大阪方言では、(5) のように、アクセント核を担う母音が無声化しても、アクセント核は移動しないという事実がある。

- (5) a. yamaguṭṭi' -keN (LLLH-LL) *yamagu' ṭṭi-keN (LLHL-LL)
 b. teikuu-hi' kou (HHHH-HLL) *teikuu-hiko'u (HHHH-HHL)

東京方言と大阪方言におけるこの音韻論的差異（母音の無声化に伴うアクセント核移動の有無）を機能的対応の観点から説明するためには、服部 (1928) や杉藤 (1982) による研究を参照しておく必要がある。杉藤によれば、大阪弁において、無声化母音でもアクセント核が聞こえるのは、胸骨舌骨筋 (sternohyoid (SH, 図 11)) と呼ばれる筋肉を用いて作られた、後続母音の下降音調であるとされる。例えば、図 12 では、「草 (kusa; HL)」と「櫛 (kusi; HL)」を大阪弁で発音した場合のピッチの動きなどがグラフにまとめられている。いずれも大阪弁では 1 拍目にアクセント核を持つ語であるが、「草」はその拍の母音が無声化した場合の発音、「櫛」は無声化が生じていない場合の発音がグラフ化されている点に留意されたい。まず、図 12 の最上段のグラフを見てわかるように、1 拍目の母音が無声化した「草」では、「櫛」に比べて、2 拍目のピッチが大きく下降していることが読み取れる。また、3 段目のグラフは胸骨舌骨筋 (SH) の働きを捉えた筋電図であるが、「草」を発音する際、2 拍目の直前で胸骨舌骨筋が大きく反応している様子が分かる。杉藤は、この実験結果を基に、kusa (HL) のアクセント核を作り出す 2 拍目の下降は、胸骨舌骨筋が有するピッチ低下の働きによるものであると示唆している。

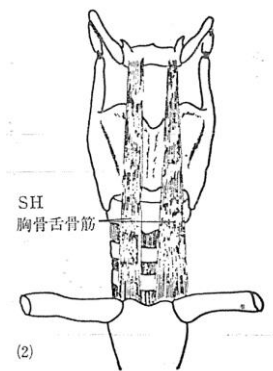


図 11：胸骨舌骨筋の位置

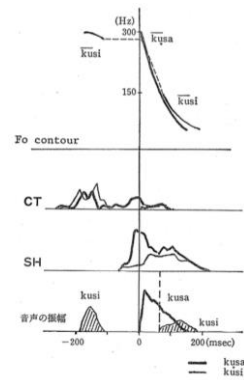


図 12：大阪弁における「草」と「櫛」の発音

杉藤 (1982) による以上の議論は、認知言語学の観点からは、次のように解釈することができる。すなわち、東京方言と大阪方言において、アクセント核移動の有無という音韻ドメインでの値の違いが生じる理由は、それに対応する音声ドメインでの値（胸骨舌骨筋の運動）の違いに求められるということである。また、この主張を裏付けると考えられる杉藤 (1982) の指摘として、胸骨舌骨筋は大阪方言における低起式の発音にも関わる可能性が示唆されている点がある。Shibatani (1990) などによっても記述されているように、低起式と高起式の対立は、大阪方言を含むいわゆる「関西弁 (図 13 の Kyōto-Ōsaka)」の特徴とされ、東京方言ではその対立が時代を経る中で失われていることと考え併せても、非常に興味深いと思われる（平安期のアクセント体系から大阪方言が生じ、さらに東京方言のアクセント体系が生じていく過程については、金田一 1975/1995などを参照されたい）。文法化の観点からまとめると、東京方言のアクセント核移動を引き起こす要因に関しては、(i) 母音の無声化に加えて (ii) 胸骨舌骨筋の運動の弱まりという 2 つの弱化 (lenition) によって支えられているものであることが日本語の変種を考慮に入れた機能的分析からは明らかになる。

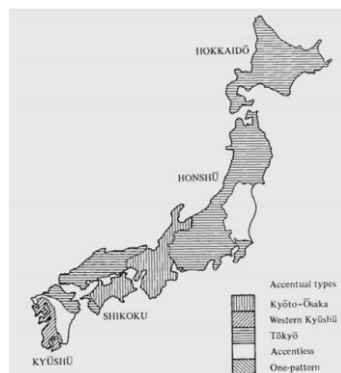


図 13：日本語の方言アクセント分布図 (Shibatani 1990: 211)

4. おわりに

本稿では、認知言語学における概念や考え方が、音声・音韻ドメインの分析においても有用に働くことを示した。具体的には、日本語の VOT の変化は、認知言語学における「主観化」の考え方によって適切に分析できることと、日本語のアクセント核移動現象に対して機能的動機づけを与え得ることを示した。

参考文献

- 秋永一枝 (1985) 「共通語のアクセント」 NHK 編『日本語発音アクセント辞典 改訂新版』: 付録、70–116, 日本放送出版協会.
- 金田一春彦 (1975/1995) 『日本の方言—アクセントの変遷とその実相—』, 教育出版.
- 佐藤利男 (1958) 「有声, 無声破裂音の時間要素の差異について」『日本音響学会誌』14(2): 117–122.
- 佐藤大和 (1974) 「ピッチパターンと音韻の関連に関する二・三の検討」『日本音響学会講演論文集』435–436.
- 清水克正 (2000) 「閉鎖子音の有声性・無声性についての普遍的特徴」『名古屋学院大学論集 言語文化篇』12(1): 63–70.
- 杉藤美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』, 三省堂.
- 高田三枝子 (2011) 『日本語の語頭閉鎖音の研究—VOT の共時的分布と通時的変化—』, くろしお出版.
- 服部四郎 (1928) 「三重縣亀山町地方の二音節語に就て (1)」『音声学協会会報』11: 11.
- 横谷輝男 (1997) 「フット境界を越えるアクセント核移動: 東京方言複合名詞からの証拠」『音声研究』1(1): 54–62.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, London and New York, Longman.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*, London: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Geeraerts, Dirk and Hubert Cuyckens (eds.) (2007) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, Oxford, Oxford University Press.
- Gordon, Matthew K. (2016) *Phonological Typology*, Oxford, Oxford University Press.
- Haraguchi, Shosuke (1991) *A Theory of Stress and Accent*, Dordrecht: Foris.
- Lakoff, George (1993) “Cognitive Phonology,” *The Last Phonological Rules: Reflections on Constraints and Derivations*, edited by J. Goldsmith, Chicago and London: Chicago University Press, 117–145.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar Vol. 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford, Stanford University Press.
- Langacker Ronald W. (1990) “Subjectification,” *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of*

- Grammar*:315–344. Mouton de Gruyter.
- Langacker Ronald W. (1999) “Losing control: grammaticization, subjectification, and transparency,” *Historical Semantics and Cognition*, edited by Andreas Blank and Peter Koch, De Gruyter Mouton.
- Langacker Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford, Oxford University Press.
- Nathan, Geoffrey S. (2007) “Phonology,” *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, edited by Dirk and Hubert Cuyckens, 611-631, Oxford: OUP.
- Ohala, John (1993). “The phonetics of sound change,” *Historical Linguistics: Problems and Perspectives*, edited by Charles Jones, London and New York: Routledge, 237–278.
- Shibatani, Masayoshi (1985) “Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis,” *Language* 61–4, 821–848.
- Shibatani, Masayoshi (1990) *The Languages of Japan*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Yamada, Eiji (1990) “Stress Assignment in Tokyo Japanese: Stress Shift, and Stress in Suffixation” 『福岡大学人文論叢』 22: 97–154.

ふたたびフランス語の隠喩性について

春木仁孝

1. はじめに

筆者はこれまでに春木(2017, 2021)などにおいて、物の命名法やオノマトペの用いられ方、あるいは様態を動詞の中に取り込んで表現する点などを取り上げて、フランス語が隠喩的であることを指摘してきた。このフランス語の隠喩的な性格を論じるにあたっては、フランス語に比べてむしろ直喩的であることが多い日本語と対比するという形を取ることで、この二つの言語には対蹠的な点があることを指摘してきた。しかし、春木(2017)においては紙幅の関係もあり、物の命名の場合だけではなく、そこで取り上げられている様々な現象全体を通して、直喩的である日本語に比べてフランス語が隠喩的であるという主張の説明が十分に展開しきれなかった。本稿では春木(2017)を補足しつつ、様々な現象においてフランス語が隠喩的であるという筆者の考えをより詳しく説明したい。

まず、隠喩的、直喩的という言葉の意味を確認しておこう。一般に、直喩というのはソースドメインの表現とターゲットドメインの表現を「～のような、～のように」のような類似性を明示する表現や手段でつなぐ表現方法のことであり、一方、隠喩というのはそのようなつなぎの表現を用いなくて、より直接的にソースドメインの表現でターゲットドメインのものを表わす手段である。筆者ももちろんそのような理解でこれらの言葉を用いるが、筆者はその定義をさらに拡大して、オノマトペの用いられ方や、オノマトペをいわばマナーとして語幹に含んだ動詞や、マナーを動詞の形態的あるいは語彙的变化で動詞の中に取り込んでいるような場合も、説明的でないという意味で隠喩的と考えている。詳しくは以下で各現象について論じるが、そのような拡大的な捉え方をすることがフランス語の一般的な性格を理解する上で非常に有効であるというのが筆者の考えである。

2. 物の命名における隠喩性について

物の命名において、たとえば日本語の「メロンパン」という名前には「～のような、～に似た」のような説明の言葉はないが、ソースドメインの表現「メロン」と「パン」を並置する構造を取ることで、日本語話者には「色、形あるいは味がメロンに似たパン」という理解がなされる。日本語は「A のような B」と言う場合、通常 AB という構造を取る。この AB という命名の形式は直喩的な命名である。一方、フランス語では「三日月 *croissant* のような形をしたパン」と言う場合、ソースドメインの *croissant* 「三日月」という表現をそのままターゲットドメインのもの、つまりパンの一種であるクロワッサンを表わすのに用いるのである。このような命名はまさに隠喩的な命名である。

このフランス語の隠喩的な命名は、フランス語の語彙の多義性と密接に関係している。

(1) Les *camemberts* sont souvent utilisés en économie et en finance. (Wikidia)

(2) Comment se forment les *moutons* sous nos meubles ?¹

(3) J'ai trouvé une *coquille* dans la dernière page.

上記の例の中のイタリック体の語は、ある程度フランス語に親しんだ者なら誰もが知っている日常的な語である。しかし、多くの人が最初に覚える意味ではこれらの例は理解できない。(1)は「円グラフ」、(2)は「綿ぼこり」、(3)は「誤植、ミスプリント」という意味である。(1)が「カマンベールのような形をしたグラフ」という比喩的意味拡張であることはすぐに理解できる。説明的な *graphique (diagramme) en forme de camembert* という表現もあるが、文脈があれば *camembert* で十分である²。(2)は羊と綿ぼこりではサイズの違いが大きい、フワフワした印象が似ているのでこの比喩的意味拡張も感覚的に納得できる。(3)の貝殻、殻を表わす語が誤植を意味するようになった経緯については複数の説があるものの、いずれも確かではない³。経緯が明らかでない(3)も含めていずれも形式的には隠喩的命名であり、結果的にこれらの語は多義語となっている。

(1)~(3)はよく知られた意味が出発点となって例文にあるような比喩的な意味拡張が起こったのであったが、逆によく知られた意味が意味拡張の結果である場合も存在する。

(4) « Il m'a tapée. C'est un *maquereau*. » (Camus : *l'étranger*)

「あいつは私を叩いたの。あいつはポン引きよ。」

maquereau はもともと「ブローカー、仲介人」を意味していたが、次第に「売春宿のオーナー」→「ひも、ポン引き」と意味が変化した。こちらの領域（何らかの役割を持つ人）の意味が原義で、そこから学習者が最初に覚える意味である魚の領域の「鯖」へと意味が拡張されたものであるが、この意味拡張の経緯もよく分かっていない⁴。

(3)や(4)のように意味拡張の経緯が明らかでない場合もあるが、これらの例も何らかの比喩的な意味拡張により意味が定着したものであり、形式として隠喩的な命名と考えられる。

3. 形式としての隠喩的命名、直喩的命名

先に、日本語は「A のような B」と言う場合、通常 AB という形式を取り、フランス語では直接的に A という形式を取ると述べた。日本語が AB という形を取った場合、基本的に A と B の間には類似性、近接性（メトニミー）という比喩的關係があるが、結局、A で B を説明して特定していると考えられる。

たとえば日本語の「桜餅」は餅が桜色をしており、また桜の葉に包まれている。色は桜に似ているが、桜の葉に包まれている点は「～のような、～に似た」という関係ではなく桜の葉との近接性、メトニミーの関係である。このような AB 型の命名形式は、カテゴリーを表

¹ ネットからの例や作例については出典は省略する。

² *graphique circulaire* という表現もあるが、*camembert* の方が視覚に訴えて表現としてインパクトが強い。

³ 歴史的経緯は別として、個人的には卵を使った料理の中に卵の殻の小さなかけらが入っているのに気付いたときの不快感と、ページの中に誤植（小さな瑕疵）を見つけたときの感覚が対応するので納得できる。

⁴ この中世オランダ語起源の語の意味拡張については、鯖が鯀の群れに付いて泳ぐので結果的に鯀の雌と雄が近づくことになるという俗説に原義との類似点を見たものであるという説があるが、Rey(2010)には「鯖」という意味の出現に比べてこの俗説が比較的新しいものであるとの説は成立し難いと記されている。

わす B に A を前置することで特定の B であることを理解させるという働きをしている。A と B の間に比喩的關係がなくとも A が B を特定する役割を果たしていれば、そのような場合も筆者は広く直喩的命名と考える。一方、フランス語はカテゴリーを表わす B を言わずに A で B を表わすことが多いのだが、その場合、A に対する類似性だけでなくやはり近接性による場合もある。いずれにしろカテゴリーを表わす B がないだけに、それが何を意味するのか、どのような領域のものなのかは文脈や聞き手の知識に依存するところが大きい。たとえば *religieuse* という語を聞いても、実際に色と形が「修道女」を思わせるケーキを前にしているか、既にその名前を知っていなければエクレーアの一種だとは分からない。

フランス語の隠喩的命名がどのような領域に多く見られるかについては春木(2017, 2021)をご覧いただきたいが、少し分かりにくい場合を補足説明しておきたい。

たとえばフランス軍の主力戦闘機 *Rafale* 「突風」やミサイル *Exocet* 「飛び魚」⁵ の場合は隠喩的命名だが、アーサー王伝説に出てくる剣は *Excalibur* であり、『ロランの歌』でロランが持っている剣は *Durandal* と固有名詞的である。一方、日本語では剣には「山姥切」のように「～丸、～剣、～切」という刀であることを示す表現が付く⁶。A の部分はその刀の言われ（「これこれの時に使われた／これこれのために使われた刀」というような伝説や言い伝え）を表わすが、これも広くメトニミーの關係と捉えることができる。フランス語の *Durandal* のような場合は固有名詞的な表現の中にいわば「～剣」のような部分が取り込まれているという意味で形式的には隠喩的命名と考えたい。

カテゴリー名を用いないというのは舟の場合にも見られる。日本語では舟は「～丸、～号」という形式を取るが、フランス語などではよく知られた、あるいは身近な人名や地名をそのまま舟の名前として用いる場合も多い。たとえば *Le Charles de Gaulle* 「空母シャルル・ド・ゴール」は元大統領のシャルル・ド・ゴールを記念しての名付けであるが、このような場合、多少ともその人物や地名のイメージが想起されるという意味では比喩的ということもできるかも知れない。いずれにしろ命名の形式としては隠喩的である。

フランス語では人名がそのまま、あるいは多少の語尾変化を伴って物の名前として使われている場合がよくある：*poubelle* 「ゴミ容器」（←*Eugène Poubelle*）、*guillotine* 「ギロチン」（←*Joseph Guillotin*）、*braille* 「点字」（←*L. Braille*）、*mansarde* 「屋根裏部屋」（←*F. Mansart*）。これらはその物を発明・考案した人、あるいはその物を好んだ人の名前が元になっている。日本語なら「プベル式ゴミ容器」のような説明的な命名形式になるところであるが、フランス語では隠喩的命名形式を取っている。この場合もメトニミーの關係と考えることができる。

4. マナーとオノマトペ

⁵ 「飛び魚」の場合の発音は[egzɔzɛ]だが、ミサイルの場合は[egzɔzɛt]と語末子音を発音する。

⁶ 春木(2017)でも述べたように、「鉋切長光」のように刀工の名前が付く場合もあるが、これは刀工がメトニミー的に刀を表わしているので、「～剣」という形式と同じである。

4. 1. 発話とオノマトペの関係

日本語ではオノマトペは漫画の中や間投詞的な場合をのぞき、オノマトペ単独ではなく、常に「～（と）／（という）音をたてる」、「～（と）いう」、「～（と）鳴く」のように引用的に用いられる。この引用表現「～と／～という」の部分は、「～のような／～のように」と言い換えることができるが、実際の音をその言語の音的制限の中で可能なオノマトペに比定しているわけであり、直喩的表現と考えることができる。

フランス語ではオノマトペを文内で用いるには制限が多い。まず「～という音をたてる」という意味の動詞（*faire* など）、あるいは「～という音が聞こえる」という意味の動詞（*entendre* など）の目的語にオノマトペを用いることができる。このような場合、春木（2013）で見たようにオノマトペは限定詞を伴わないことが多く、また引用符が付いていたリイタリックになっている場合も多い。つまり目的語のスロットにあるものの、オノマトペは間投詞的に直接引用されていると考えられる⁷。日本語の場合を間接話法的とするとフランス語の場合は直接話法的なのである。言い換えればフランス語のオノマトペは品詞的に名詞としては未成熟なのである。従って主語として用いられる場合も限られるが、主語の場合は主語の意味論的な性格上、目的語の場合よりも何らかの限定詞が付くことが多い。

(4) (...) mes pas font *top top top* dans le silence de la ruelle, (...)

(P. Delabroy-Allard, *Qui sait.* : 134)

「私の足音が静かな路地でパタパタパタと音をたてた」

(5) J'entends *clic-clac*. Quelqu'un a fermé la porte du 3^{ème} étage.

「カチリカチリと音がした（←カチリカチリという音が聞こえた）。誰かが4階の扉を閉めたのだ」

(6) Un *clic* s'entend dans l'ordinateur. 「コンピュータの中でカチッという音がした」

(7) Dans la maison de retraite, le *ronron* de *minou* est considéré comme un antidépresseur.⁸

「退職者ホームでは猫がゴロゴロと喉をならす音は抗鬱効果があると考えられている」

以上はオノマトペそのものが持つ直喩的、隠喩的性格についてであったが、フランス語の隠喩的性格が前面に出てくるもう一つの場合はマナーとしてのオノマトペのありようである。フランス語の場合、オノマトペは辞書ではオノマトペ、あるいは間投詞と記されており、*ronron* など一部のオノマトペについては名詞とも記されている。一方、日本語の場合は辞書ではオノマトペは副詞と表記されている⁹。

日本語ではオノマトペは引用形式を伴ってかなり自由に文中にマナー表現として用い

⁷ このような場合の限定詞の有無、繰り返し、複数の *s* の有無などについては春木(2012, 2013)などを参照されたい。

⁸ この例の *ronron* はオノマトペ（起源）ではあるが、名詞としてかなり安定しており単に「猫が喉を鳴らす音」と訳す方が適切かもしれない。

⁹ オノマトペそのものがマナーを表わすと考えれば副詞という表記にも根拠があるとも言えるが、文中では少なくとも「と」という引用マーカーを用いなければ非文になる（「*戸がボタン閉まった」）ので、オノマトペそのものは<オノマトペ>（あるいは<間投詞>）と表記すべきである。（「ゴロゴロ転がる」のように「と」がない場合も「と」を補えるので、「と」が省略されたものと考えるべきである。特に繰り返し形式の後では「と」を省略しやすい。）

ることができる。一方、フランス語では文の中でマナーを表わす構成要素としてオノマトペを副詞的に用いることは難しい。これについては春木(2020)でも考察したが、結局日本語のオノマトペが引用形式を伴った直喩的形式で副詞化されることにより、文中の構成要素として働くことができるのに対して、フランス語のオノマトペはあくまでも隠喩的に現実の音に関連づけられる間投詞であり、原則として文頭または文末に遊離されて同格的に発話内容を説明する形でしか用いることはできない。動詞の直後、つまり文内に置かれているように見える場合も、一般的にカンマで挟まれたりイタリックになっていて挿入的である。あくまでも文の構成要素ではないのである。

(8) Mais dans la cuisine, il y a ce robinet qui goutte dans l'évier, *ploc, ploc*, (...)

(L. Mauvignier, *Continuer* : 61)

「しかし台所では蛇口から流しにポトンポトンと水が落ちていた」(原文イタリック)

(9) Je dis, Attention Garva, ne va pas te prononcer trop fort contre l'ordre établi parce que *pan pan* on te descendra. (A. Saumont, *La terre est à nous* : 136)

「(...) だって、言い過ぎたらパンパンと(銃で)やられてしまうよ」

(10) (...) le four se referme *clac* sur feu la feuille. (P. Gautier, *Mercredi* : 30)

「かまどのような口はカチッと可哀想なサラダ菜の葉の上で閉じた」

(11) (...) le fleuve se fout des poils, il trouve le chemin, ça descend sur les chevilles, ça s'arrête à la malléole et de là, ça goutte, *ploc, ploc*, sur le sol.

(P. Delabroy-Allard, *Qui sait* : 144)

「(メンスの) 血の流れは恥毛を無視して道を見つけ、足首まで降りていき、くるぶしのところで止まって、そこから床にポトポト(と)落ちていく」

(10) はオノマトペが副詞のようにカンマなしで動詞の後に挿入された稀な例である。(11) はオノマトペがカンマで前後から切り離されてはいるが、かなり自然に読める例である。通常であれば *clac* や *ploc, ploc* は文末に置かれて同格的に文内容を補足するところであるが、目的語を取らない再帰構文の自発的用法や自動詞の場合は、動詞の直後にオノマトペを副詞的に挿入しやすいと考えられる。いずれにしろ(10)(11)のようなケースはかなり稀である。

4. 2. オノマトペ動詞

以上のように、日本語とは違ってオノマトペを文中で副詞的に用いにくいフランス語では、音に関係するマナーを表わす手段として、オノマトペを動詞の中に取り込んだオノマトペ動詞が存在する。この場合、オノマトペ的な部分が動詞の中に取り込まれているという点で隠喩的である。この種のオノマトペ動詞にはいくつかのタイプが存在する。

まず既存のオノマトペを動詞化した以下のような動詞がある¹⁰。

glouglou → *glouglouter* 「(液体が) ゴボゴボ／ドクドク／とくとくと音をたてる」

froufrou → *froufrouter* 「(布、葉叢、小川、羽などが) サラサラと音をたてる」

¹⁰ オノマトペ動詞からオノマトペが逆方向に派生した場合も存在する。*vrombir* 「(虫が) ブンブン言う、(エンジン・機械が) うなる」 → *vroum* 「エンジンがたてるブルンブルンという音」。

ronron → ronronner 「(猫が) 喉をゴロゴロ鳴らす」

crac → craquer¹¹ 「きしむ、(乾いた音をたてて) 裂ける」、se craqueler 「罅がはいる」
不定詞語尾-er を付けるために子音 (字) の添加や変化があっても、元のオノマトペが明白に透けて見える場合である。ただしこのタイプは意外に少数であり、生産的ではない。このタイプに関連して非常に興味深いのが以下の例である。

(12) (...) le sang qui *ploc ploc* sur le sol (...) (P. Delabroy-Allard, *Qui sait.* : 146)

これは例(11) « ça (=血) goutte, *ploc, ploc*, sur le sol » の少し後の部分で主人公が同じことを述べている部分である。例(11)では挿入的に用いられているオノマトペ *ploc, ploc* が例(12)では繰り返しの形そのまま動詞として用いられている。もちろんフランス語にはそのような動詞は存在しない。一時的、個人的にいわば力業で作られた動詞であり、動詞の活用および綴り字と発音との関係からはあり得ない形である¹²。しかしここではごく自然に受容できてしまう。動詞 *goutter* 「したたる」の意味は、本来は *goutter* のマナーを表わしていた *ploc ploc* の中に取り込まれているのである。これはまさに隠喩的な表現方法である。

次に、何らかのオノマトペから作られたのではないが、起源的にはオノマトペ的な語根から作られたと考えられる動詞のタイプがある。これには、一定の子音 (群) や唇音のように一定の素性を持った子音 (群) が特定の領域の音を表わしやすいといった音象徴の問題も絡んでくる。

grommeler 「ブツブツ言う」、*grogner* 「ぶつぶつぼやく」、*gargouiller* 「(水が) ゴボゴボと音をたてる」；*frémir* 「震える、軽い音をたてて揺れる」、*frissonner* 「震える、揺れる、そよぐ」；*susurrer* 「ささやく」、*murmurer* 「ささやく」

また鳥や動物の鳴き声も日本語の直喩的な「～と鳴く」式とは異なり、一般にオノマトペ的な動詞そのもので表わされる隠喩的な形を取り、その数は非常に多い。

beugler, meugler, mugir 「牛がモーと鳴く」、*boubouler* 「フクロウがホーホーと鳴く」、*coasser* 「蛙がクワックワツと鳴く」、*piailler, piauler, pépier, piauter* 「鳥がパイパイと鳴く」、*nasiller* 「アヒルがガアガアと鳴く」

5. 音以外のマナーと動詞

5. 1. 動詞接尾辞による場合

4 では音に関するマナーについて見たが、フランス語では音以外のマナーも基本となる動詞の語形変化で表わす場合がある。ここで取り上げるのは接尾辞が付加されてベースとなる動詞の意味が変化するタイプである。この意味の変化はベースの動詞の意味になんらかのマナーが添加されたことによる。いくつか例を挙げる。

boire 「飲む」 → *buvoter* 「(酒を)ちびりちびり飲む」
beuvailleur 「(酒を) 何度も飲む」

¹¹ *craquer* は「挫折する、失敗する」など抽象的な意味で用いられることも多い。

¹² もしも *ploc* から動詞を作るとすると不定詞は *ploquer*、現在形 3 人称単数は *ploque* となる。

manger 「食べる」 → mangeailler 「少し食べる、つまむ」
 mangeotter 「ちびちび食べる、(食欲がなく) いやいや食べる」
 discuter 「議論する」 → discuter 「つまらないことを長々と／たびたび議論する」
 dormir 「眠る」 → dormasser 「眠る (軽侮的)、い眠る」
 dormichonner 「少し眠る」、dormoter 「少し眠る」
 dormailler 「眠りが浅い、途切れ途切れに眠る」
 gratter 「引っかく、かき削る」 → gratouiller 「軽く引っかく、軽く削る」
 rêver 「夢を見る」 → rêvasser 「ぼんやりと夢想にふける、(深く眠れずに) いろいろな夢を見る」
 rimer 「詩を作る」 → rimailler 「下手な詩を作る」
 sauter 「跳ぶ」 → sautiller 「ぴよんぴよん跳ぶ、跳ね回る」
 tirer 「引っ張る」 → tirailler 「いろんな方向に何度も引っ張る」
 traîner 「うろつく、ぶらつく」 → traînasser, traînailler 「うろつく、ぐずぐずする」
 travailler 「仕事をする」 → travailloter 「適当に働く」
 vivre 「暮らす」 → vivoter 「細々と暮らす、かろうじて生きる」、
 voler 「飛ぶ」 → voleter 「ひらひら飛びまわる、はためく」

日本語訳からも分かるように、日本語ではベースとなる動詞に副詞やオノマトペ副詞をつけて表わすところを、フランス語では接尾辞を付けるという語形変化で表わしている。これは形式的には隠喩的語形成と考えることができる。

この種の動詞の数は多いが、位相的には話し言葉で用いられるものが多く、時にはかなりくだけた話し言葉と考えられるものもある。取り出せる接尾辞としては -ot(t)er¹³, -ailler, -ouiller, -iller, -asser, -onner, -iner などがある。これらの動詞接尾辞はざっと見渡すと縮小、反復、無目的性、試みなどのニュアンスを表わしている場合が多いが、実際にはそれぞれの動詞によってニュアンスは様々である。これらのマナーを含む派生動詞によく見られる意味を、先行研究を参考にしてまとめておこう¹⁴。

1) 何らかの縮小を表わす(dimunitif)

mangeailler 「(何度も) 少し食べる、つまむ」、s'amusoter 「つまらないことに興じる (対象の矮小化)」、pleuviner 「小雨が降る」

2) 事態の反復を表わす(itératif)¹⁵

buvoter 「ちびりちびり飲む」、sautiller 「ぴよんぴよん跳ぶ、跳ね回る」

3) 明瞭な目標がなく事態が離散することを表わす(incassatif)

courailler 「あちこち走り回る、放蕩する」、tirailler 「いろんな方向に何度も引っ張る」

¹³ -ot(t)er には voleter 「飛び回る」のように -cter という形もあったが、現在は -ot(t)er が優勢である。

¹⁴ ここでは Stosic et Amiot(2011)を参考になっているが、著者達の分類システムとは必ずしも一致していない。括弧の中の用語は Stosic et Amiot(2011)による。

¹⁵ refaire に見られるような「繰り返し」répétition と「反復」は異なる。

4) 事態の遂行において熱意に欠けることを表わす(tentatif)

écrivasser 「書きなぐる、ぞんざいに書く」、travailloter 「適当に仕事をする」

5) 目指す結果に至らない事態を表わす(conatif)

nageoter 「ちょっと泳ぐ、泳ぎにくそうに泳ぐ」、marchoter 「ぎこちなく歩く、歩こうとする」

実際には幾つかの意味が重なっていることも多く、また上に挙げたような意味に軽侮的(dépréciatif, péjoratif)なニュアンスが重なる場合も多い。たとえば rimailleur 「下手な詩を作る」は rimer 「詩を作る」に軽侮的なマナーが付加されたわかりやすい例であるが、marchoter が幼児や病人の歩こうとする姿を描写する場合には軽侮的なニュアンスはない。(1)と(2)のニュアンスは重なることも多い。事態が反復される場合、事態そのものが細分化されて事態のスケールが小さくなり、事態に対象がある場合はその対象、もしくは事態を担うもの(たとえば「雨」)が量的に小さくなる。(3)(4)(5)のニュアンスも文脈によっては重なり合ったり解釈が入れ替わる場合がある。また traîner と traîner のようにベースの動詞と派生動詞の意味がほとんど同じ場合は、派生動詞がより口語的であるという位相の違いになるが、これも広くマナーの付加と考えることができる。いずれにしろ、オノマトペ動詞の場合と同じくマナーを動詞の中に取り込んで表わしているという点で隠喩的な表現方法をとっている。

フランス語の派生動詞につけた訳からも分かるように、日本語はマナーを動詞の外に出して説明的、つまり直喩的に表わすのが一般的である¹⁶。

5. 2. 動詞語彙そのものによる場合

接尾辞添加のような語形変化ではなく、語彙そのものによって基本となる動詞の意味にマナーを加えた意味を表わす動詞がフランス語には数多く存在する。オノマトペ動詞や接尾辞を取る動詞と同様、マナーを含んだ隠喩的表現方策である。

春木(2017)でも挙げたが、たとえば manger を基本の動詞として考えると食べ方のマナーを含んだ「～食べる」型の意味を持つ動詞が数多く存在する。先ず manger のくだけた日常語として bouffer がある。この場合は位相の違いである。croquer は「バリバリ／かりかり食べる、かじる」と日本語ならばオノマトペを用いて表わすマナーを含んでいる。grignoter は「軽く食べる、少しずつかじる」¹⁷。さらに pignocher 「少しずつつまずそうに食べる」、chipoter 「(一口ずつ) いやいや食べる」¹⁸、savourer 「味わって食べる」、ripailler 「ごちそうをたらふく食べる」、se régaler 「おいしいものを食べる」などがある。「たらふく食べる、むさぼる」という意味の動詞は、(se) goinfrer、(se) bâfrer、licher、boustifailler¹⁹ などその数は 10 を超える。

¹⁶ 日本語にも「どつく」「すっ飛ぶ」などのように程度の高さというマナーを表わす動詞接頭辞が若干存在する。

¹⁷ grignoter は接尾辞-oter が付いているが、grigner とは現代フランス語では意味の上でペアの関係にはない。

¹⁸ chipoter も接尾辞-oter が付いているが、chipier をベースとせず、古期フランス語の名詞 chipe 「小片」からの形成。

¹⁹ boustifailler は動詞接尾辞-ailler とは無関係。

笑い方や泣き方のマナーを含む動詞も多い。春木(2017)でも挙げたが「笑う」については基本となる動詞は *rire*, *rigoler* (日常語) である。*sourire* 「ほほえむ」、*glousser* 「くっくつと笑う」、*ricaner* 「冷笑する、せせら笑う」、*rioter* 「薄ら笑いを浮かべる」²⁰とそれぞれ笑いのニュアンスを表わす。*s'esclaffer* 「どっと笑う」、*se bidonner* 「腹をかかえて笑う」など「爆笑する」に対応する動詞も *se marrer*, *se gondoler*, *se poiler* のように話し言葉に多く見られる。「爆笑する」と訳せる表現の中には *se fendre la pêche*, *se fendre la pipe*, *se fendre la gueule*, *se poiler la gueule* など再帰構文の熟語的表現も多いが、これらも目的語がマナーを表わしているのではなく、動詞句全体がマナーを含んだ「笑う」=「爆笑する」という意味を表わしているので動詞だけの場合と同列に扱うことができる。

他にも何らかの発言や声を出すことに関する動詞の領域などを思い起こしてもらえれば、フランス語には様態を含んだ様々な動詞があることが理解できるだろう。

日本語にも「爆笑する」「冷笑する」のように「漢語+する」という形式や「ほほえむ」「がっつく」のようにマナーを含んだ動詞もあるが、フランス語と比べた場合、本来の日本語にはこのタイプの動詞は比較的に少ないと考えられる。日本語ではマナーは基本的に動詞の外で説明的に表現されるのである。

6. 結論に代えて

本稿で見てきたようにフランス語では様々な現象において直接的な隠喩的表現が好まれる。一方日本語では説明的な直喩的表現が好まれる。もちろんいずれの言語においても例外は存在するが、それは主要な傾向から逸脱することによって何らかの効果を狙っているものであると説明できる場合が多い。

命名のところで見たように、隠喩的命名の結果としてフランス語には多義語が多い。これは別の見方をすればフランス語の名詞の意味が多かれ少なかれ抽象的であるということである。バゲットや指揮棒、箸などの意味を持つ *baguette* のスキーマ的な意味、つまりすべての用法に共通する意味は「細長いもの」という抽象的レベルでの意味になる。フランス語では食用となる動物とその動物の肉は同じ単語で表わされる。たとえば *mouton* は「羊(食用となる雄羊)」でありまた「羊の肉」でもある²¹。一方、英語では「羊」は *sheep* で、「羊の肉」はフランス語からの借用語 *mutton* と別の単語で表わされている²²。さらに言えば「羊の毛皮」*sheepskin* もフランス語では *mouton* である²³。バゲットの場合ほど抽象的ではないものの、「羊」とメトニミー的につながるものをすべて *mouton* と呼ぶところから *mouton* のスキーマ的な意味は英語や日本語と比べれば具象性が希薄であり、やはり多少は抽象的と言うことができる。このような場合も、*mouton* 「羊」を基本として隠喩的な意味拡張が

²⁰ *rioter* は *rire* をベースとする接尾辞-*oter* のタイプになる。「笑う」という事態の強度 *intensité* の弱化と考えられる。

²¹ もちろんフランス語では非可算名詞の食用肉の場合は部分冠詞が付くという違いがあるが、ここでは触れない。

²² 英語で動物と肉を別の語で呼んでいるのはノルマンの征服以降に存在したフランス語を話す支配階級と英語を話す一般人との間の社会的2言語併用状態が関係しているのかもしれない。

²³ 日本語では「羊」、「マトン」、そして毛皮の場合は「ムートン」と区別される。

起こった結果と考えることができる。

4.や 5.で扱った現象は、結局はフランス語におけるマナーの表わし方、動詞とマナーの関わり方という問題につながるものである。フランス語でももちろん動詞外の要素（副詞、前置詞句、ジェロンディフなど）によってマナーを表わすこともできるが、日本語などに比べるとマナーを動詞の中に取り込んでいる場合が多いのがその特徴である。そのような場合を本稿ではフランス語の隠喩的な性格の現われと考えた。

また接尾辞による動詞群に関しては、ベースの動詞が表わす典型的な事態から何らかの意味で逸脱している事態を表わしているので、そこには当然、その逸脱した事態に対する評価が含まれていることが多く、言語における評価の表わし方という問題にもつながる。

本稿では命名形式における直喩的、隠喩的という捉え方を、表現形式として説明的か直接的かという観点で捉え直し、それをフランス語におけるオノマトペの用法や動詞に見られる現象にまで広げて適用した。比喩という観点からは批判もあるかと思われるが、このような捉え方をすることで、日本語などと比較した場合にフランス語に特徴的であると考えられる現象を統一的に説明できるというのが筆者の主張である。

参考文献

- Enckell, P. et P. Rézeau (2003) *Dictionnaire des onomatopées*. Paris, PUF.
- Moline, E. et D. Stosic (2016) *L'expression de la manière en français*. Paris, Ophrys.
- Rey, Alain (sous la direction d') (2010) *Dictionnaire historique de la langue française*. Paris, Le Robert.
- Stosic, D. et D. Amiot (2011) « Quand la morphologie fait des manières : les verbes évaluatifs et l'expression de la manière en français » D. Amiot, W. De Mulder, E. Moline et D. Stosic (éds), *Ars Grammatica*. Bern, Peter Lang : 403-430.
- 川口順二 (1998) 「動物名から道具名へーメトニミ、メタファ、意味の変化ー」 *藝文研究* 75 : 112-127. (慶應義塾大学藝文学会)
- 川口順二 (1999) 「ふたたび動物名をめぐって」 *藝文研究* 77 : 362-376. (慶應義塾大学藝文学会)
- 春木仁孝 (2012) 「フランス語におけるオノマトペ効果について」『川口順二教授退任記念論文集』pp.25-38
(ウェブ出版: <https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-01511628> および冊子体の私家版)
- 春木仁孝 (2013) 「フランス語のオノマトペーオノマトペの名詞性を中心にー」『時空と認知の言語学』II : 49-58. (言語文化共同研究プロジェクト 2012、大阪大学大学院言語文化研究科)
- 春木仁孝 (2017) 「直喩的な日本語、隠喩的なフランス語」『時空と認知の言語学』VI : 31-40. (言語文化共同研究プロジェクト 2016、大阪大学大学院言語文化研究科)
- 春木仁孝 (2020) 「現代フランス語のオノマトペと構文」『Correspondances コレスポンダンス』、朝日出版社 : 775-787.
- 春木仁孝 (2021) 『フランス語の発想 日本語の発想との比較を通して』、朝日出版社、180p.

執筆者紹介（掲載順）

高橋克欣（TAKAHASHI, Katsuyoshi）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座

瀧田恵巳（TAKITA, Emi）

大阪大学名誉教授

田村幸誠（TAMURA, Yukishige）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座

松浦幸祐（MATSUURA, Kosuke）

日本語日本文化教育センター

春木仁孝（HARUKI, Yoshitaka）

大阪大学名誉教授

（2024 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2023

時空と認知の言語学 XIII

2024 年 5 月 31 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻